

繪本佐野叔義録

貳編

全

特 60

243

繪本
佐野報
義錄
二編



浮田之從者作助

芳洲



浮田之徒者作助

芳洲

二編二〇ノ一



若殿満元公



浮田之僕鹿藏



浮田民助正辰

繪本佐野報義録二編目錄

長盛藏人仁計浮田爲十郎助くる話 第五

大館意赴と含めて浮田を殺害する話 第六

鹿藏乃義心浮田敵討の供に立話 第七

浮田主從御暇蒙りて敵討出立の話 第八

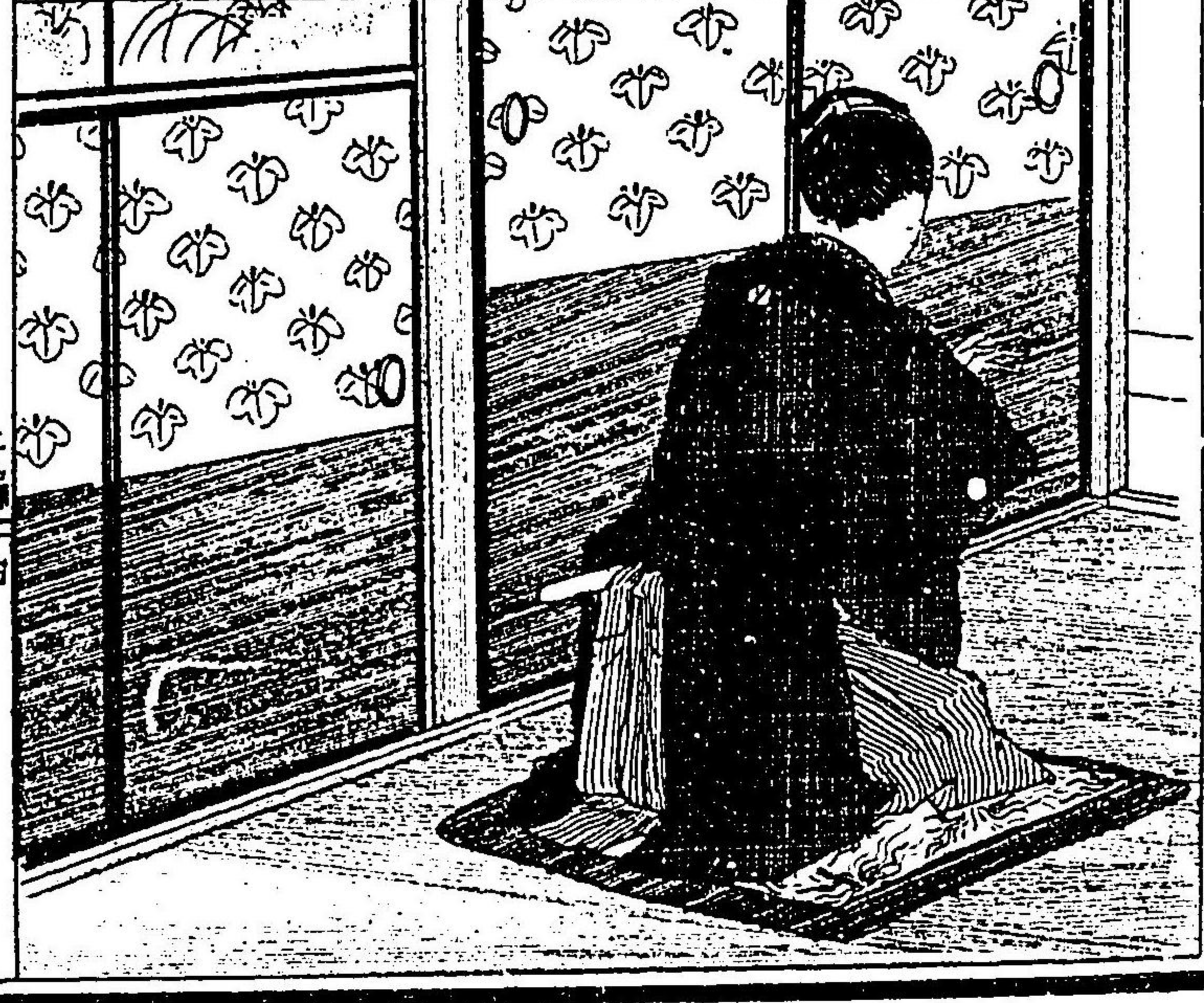
計四回二編目錄 終

忠て音川の老職長盛藏人ハ預りの罪人爲十
 郎對ひ足下不測の此大難ハ某も殆執成
 の便失へり最も釣匙を遺し某の行状
 を考察する小全く足下小恨ミを懐く族有て
 の処爲と思へり心的りの工かまやと問ハ
 爲十郎頭を傾け命せ至極の差マ侍へとも某
 曾て人と争論せせ固り小怨ミを受つ
 る平生小位悪仕もゆ失すの心的りの之
 念して云様俺足下の篤別を知が故もや然
 様の儀ハ非ぞと思へ人ハ偏執嫉妬と云
 て己が非を悔ま人ハ冤狂他人の愁ひを歎
 ぶ的あり思惟は釣匙を遺し置ハ賊を足下
 の処爲と者せて君の怒りを増長せし刑よ



藏人
 爲十郎
 説き諭き
 四

陥して害ハ人と計狡奸曲ハ癖者極たり此
 盜賊ハ遠き非手備ハ俺藩中の的もや
 有ん然ながら宝劔を奪ハ上ハ深秘する
 或ハ亦人他手ハ遠手て遠く奔らせ詮除
 る手敗やせ人且差せりて足下の一命ハ若
 殿御憤り深く在て切服命せ付らるる某
 深く悼思ふ而已君命難ハ有共某令
 一應御諫言申上助命の宥免願ふて者ん必
 逸まつて死せむべし情厚く諭されけり
 ハ爲十郎漫感涙を流して大切の役僕不調
 法仕り武士らしく思召バ切服命せ下
 さる殿ハ偏主命の御情は侍小當此上ハ父
 傳五右門が躬の上別御咎めたま申し受
 ハ相果る爲十郎が躬小執事の御心配り
 多し速切服仕り度候と云を藏人再び制め
 て否々夫ハ短慮と云べし生ハ難く死ハ易
 と云死る計りを忠我とせ且々此方よ任

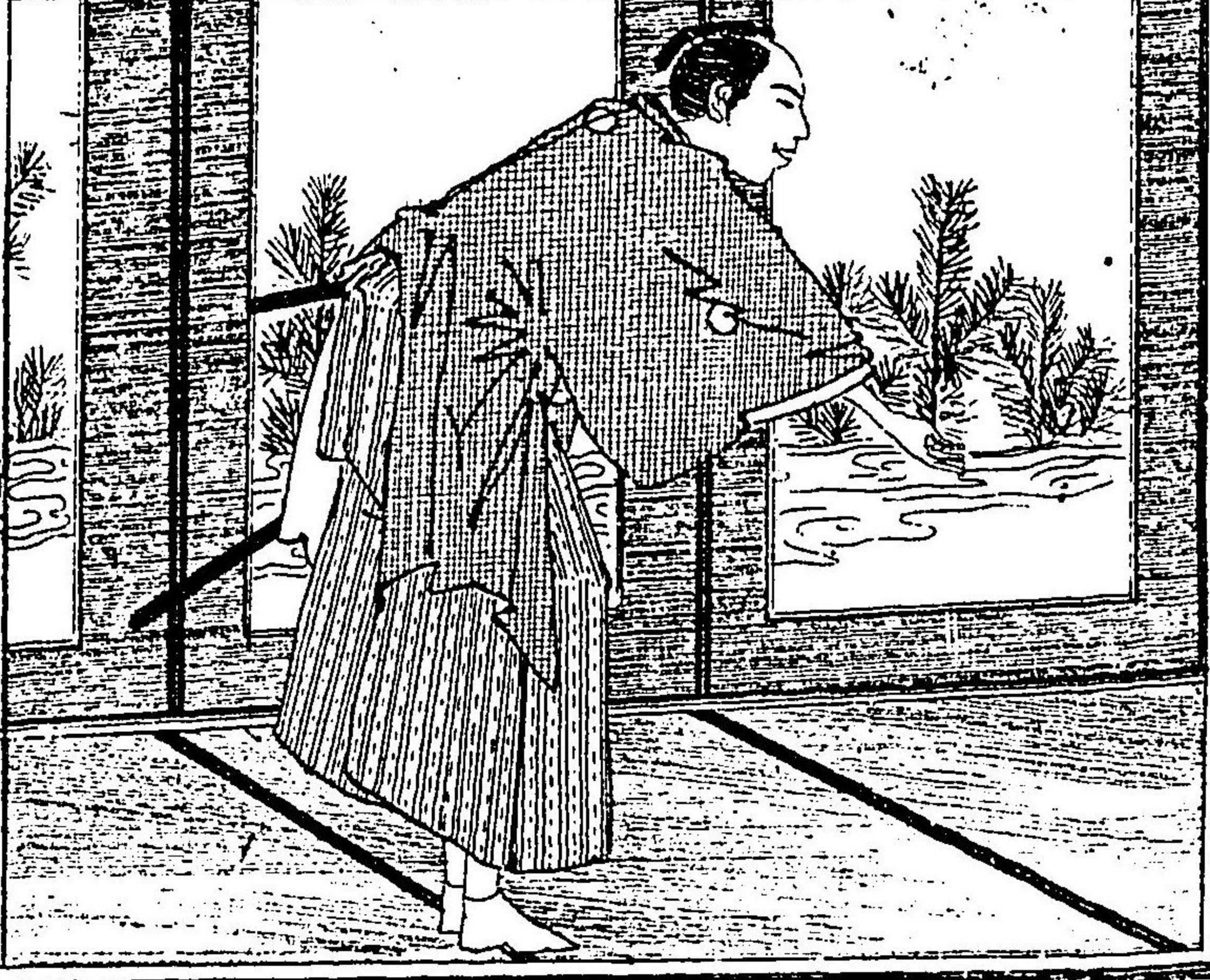


給へと強ち小謀め制めて馳て浮田傳五右
工門方へ此趣きを申送りて心痛の會釋せし
れけれ傳五右工門も深く駭き且爲十郎の
不調法憤り藏人の懇情を感謝し使節小對ひ
て申しけるハ不届きの孩兒御咎めの般那上
申し侘る詞もあく御前の思し召恐れ入奉る
親の庭訓正しうりざる故りと老悔膝を啗始
未は候帝傳五右工門の翼ふ外ハ御宝劔詮議
の一條而已孩兒の刑罪御計ひハ宜敷御家法
小願ひ奉る此議御披露下さるへしと返答な
してそ帰りしける恠て傳五右工門ハ別般小
長盛の方へ會釋せんとて若黨作助と云る
をバ即刻使して趣りめせ般執事の御仁
心の程恩禮伸し場を場さればと口演させ
て亦爲十郎ハ小方不届き申すも益あり只
潔く切服なして罪の分解を繕ふべしと云し
む此若黨なる作助ハ浮田の家の譜代とて



長盛の使者
浮田
至る凶

奈何ある困縁もや有けん被爲十郎の面鏡上
ハ見紛ふ如く小似たりけれ知ぬ人ハ兄弟
と思心的多し藏人此若黨の面を暗めて漸
時打まひれが齡を尋ね亦名を問れ
馳て浮田へと帰されたり然程長盛藏人ハ
ハ小翌朝御殿に出仕るて御前罷り出
申けるハ一昨夜宝藏の偷賊朝日丸紛失一條
は就小罪浮田爲十郎は羅り御墳御最も至極
仕り渠切服の命せよハ候へ共万乞御仁計の
思し召を以爲十郎を助命あし下さるハ宝劔
詮議を申付て再び宝庫は収むるとハ君の御
仁徳もて相成べし君子二言あしハ申せ
ども早竟ハ渠役目の鹿相而已別は犯せし罪
も有ぬハ聊不便の事もて候翼くハ臣を愛せ
る御再応の尊慮有間欲く詞を場して言上
せよ満元未だ怒氣治まらぬハ御氣色変り
て曰小様勤番の夜も職を懈怠宝庫壞く

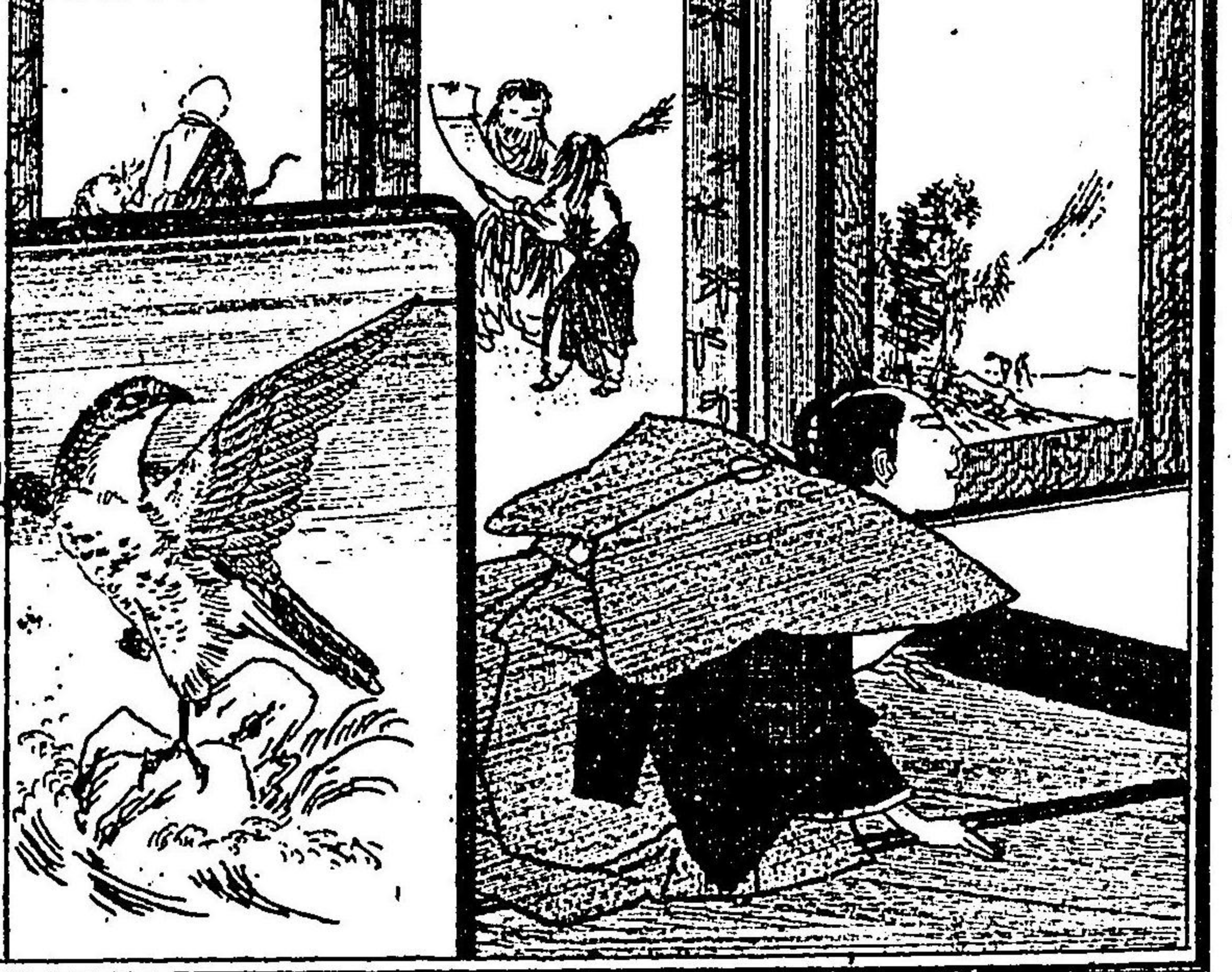


を知らざる空氣的助命せめて宝釵の詮議ハ
 那ぞ為十郎不相応へ覚束なき助けんト云
 執事の詞依估み似たり殊に釣匙を出して證
 據ト云亦是を失へる品ト云ハ渠が処存小
 物有と思ハる嚴く拷問も懸べき処を公
 夙説もあく切服させハ是満元が情小有キヤ
 藏人此時中けるハ恐れあがら為十郎ハ御
 鑑をさへ領け給ふ宝釵を奪ふ心ありハ
 を破り壁を穿ぎ共奪ふ手段ハ幾許も侍
 已ら釣匙を落し置て己罪を索むる様小己
 より論理的の候ふべきや是為十郎ハ悪心
 き證識ニ亦長盛の依估と命せらる君の御
 一言公意を得ず候夫人の一命重きトハ皆長
 天地の中の靈長ハ宝釵詮議を脇となして臣
 下の愆罪を夫し給ふ是詮議の種失ふが
 如し罪の疑ハしきを罰せし過失を宥めて人
 痛りぎと侍小君ハ一番中主ハ父母ハ御仁

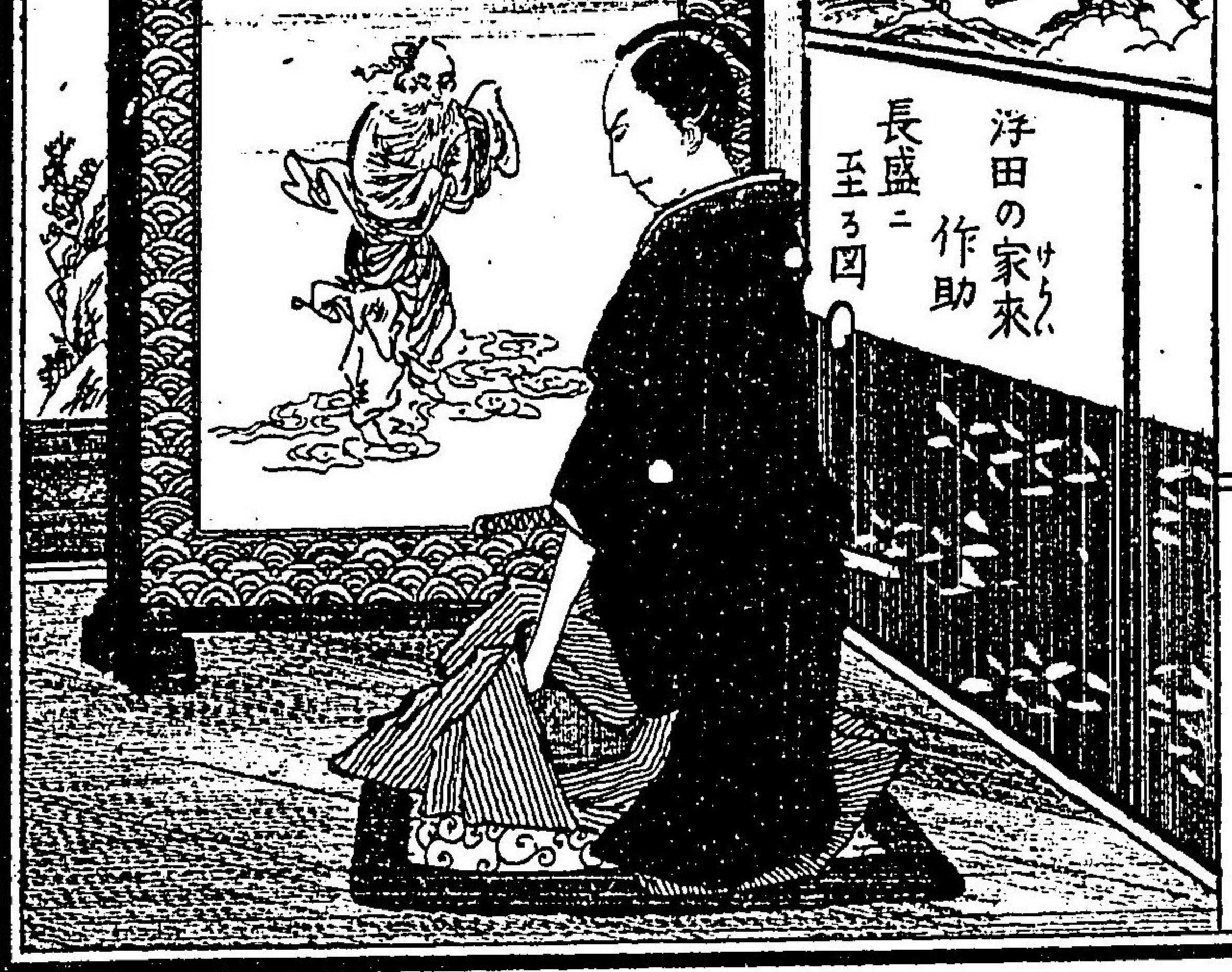


藏人 満元公 諫る 四

計以下ハ立へし依て再心算小外小候へ依估
 長負仕る藏人なご大殿の御目鑑を蒙りて
 豈國政を任し給ふべきや恐れなき御賢考
 下さるべしと憚る言上せしりハ満元
 理屈屈し給ふと雖も彼橋左近之助御傍に在
 て密に為十郎を諷口せし故怒倍面見ハれ
 些も許容あし給ハギ再藏人ハ命せける様ハ
 依估の夙説ハ右まれ左まれ主の重宝を賊小
 把れし躬の職分を疎略みなキト此上の不忠
 者有べくハば助命決して相協ふまじ達て小
 方是を拒まば急度沙汰も速ぶへし疾々為
 十郎小切服させて首持参致すべしと罵り給
 小長盛藏人も詮方なく然まで命せられな
 畏りぬと長嘆して御前を退き家俺弟小立帰
 りつゝ為十郎小對面して是水を逐一語りけ
 れハ為十郎も期したるトハ藏人の仁慈を
 感謝し今場は肚を斬となすを藏人少刺と



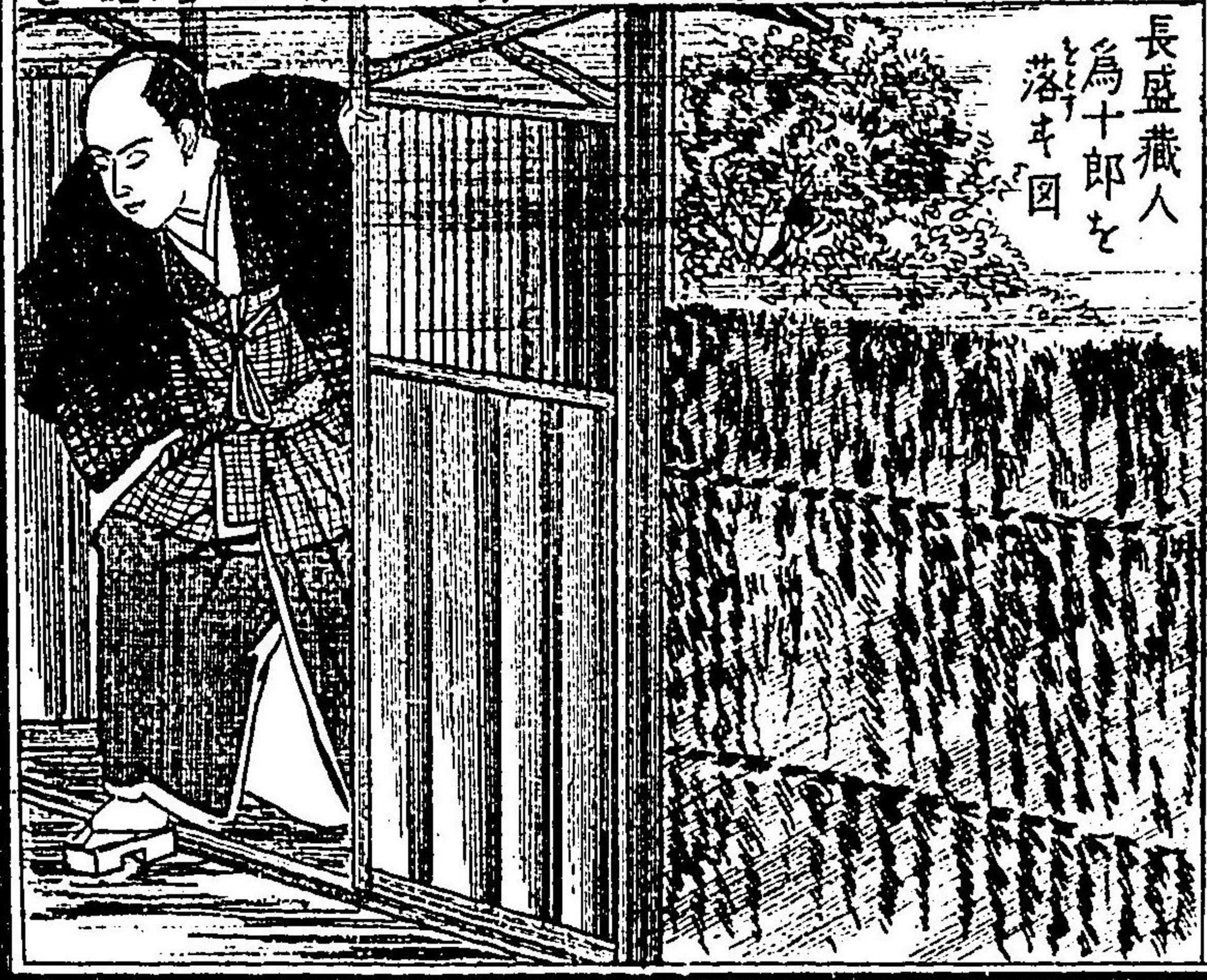
是を制して覚悟の切服未だ疾く忠義を立
 て汚名を雪ぐ耻を忍ぶの工夫はなきやと云
 ば爲十郎面を正して是ハ執事ハ異なる御
 詞耻を忍ぶの工夫と曰ふハ載人声を擧めて
 云ける様ハ然ハ然ハ然ハ然ハ然ハ然ハ然ハ然
 を犯して君へ助命を願ふ処ハ然共許容下ら
 ざれば緯茲は速くは到れ共足下の処存一個
 を以載人計ハ密策有ハ帝速ハ弟を立退宝釧
 の詮駁致さるべしと云ハ爲十郎打駁きて拙
 者然様の不忠を致さバ執事を始め親傳五右
 工門も此上奈何なる御咎めら有ん然らバ
 不忠ハ不忠を累ね不美と云れん不孝とや
 せしれんハ奈何と辞退けれハ載人點頭
 て四方を看廻し謀事ハ密なるを以可トキ宝
 釧の盜賊を探るハ是則ち足下職分の分鮮
 密立退て影を隠し探索して得らる則ハ
 忠孝も立明も立道理ハ最も帰参の餘もな



後難両家小懸らぬ様の且君前をも繕ふ手段
 ハ載人方寸の謀事あり此儀奈何と勸め
 れたり爲十郎ハ破乱くと涙を落し誠貴
 殿の御仁愛ハ何日の世もハ報じ場さん令
 せ小隨ひ立退申べし後の処ハ帝能様小願ひ
 上奉ると諾ひける載人も俱小打飲ひて路費
 の手當ると準備しつ夜小入て人も知せ
 る弟の背門より卒と出し竊小助けて奔らせ
 けるハ世ハ有難き仁義の武士実音川家の大
 忠臣と人尊ミも理ひりけり侍て亦浮田傳
 五右工門ハ爲十郎が躬の落着を如何ありし
 と心懸りして亦者黨作助を便して老職長
 盛の弟へ遣し頃日執扱ひを禮謝せしむ載人
 ハ能時節と立出作助を一室へ招き入備那と
 るく語りて曰く汝世般爲十郎の大難ハ公家
 又仕へバ氣懸りも人是を救ハん処存ハ無
 やと問れて作助頭を下郎とハ浮田譜代の家



僕もれ小官人の御難儀傳未実よ心緒を
痛め候へ那も常下賤の躬も思ふ甲斐
なく愁ひ候至の一命も變れるあはれ惜
み候ハも云藏人小詞も着込て天晴潔き
汝の一言も武家仕へハ然こそ有ん然ら
此藏人の憑有爲十郎主君の御積り強
命救ふ小介術なき倅倅介方同貌能似たり浮
田が家の浮沈の場処速小一命を俺へ得させ
ま究竟の身代り汝も有と云れて作助大き
怖りし猛可も躬を戦はして答へけるハ一
ハ御理も侍へ共此儀主人傳五右工門へ申
入たる介上まで奈何も御役も相申さんと云
つ席を起りけるを藏人扯留て亦云様刺限
切てハ介詮もなき傳五右工門方ハ此方よ
り別便節を以達せべ一言放てハ武士と
武士へ違背なく命を呉ふ卒々刀を奪て詰
懸る作助今ハ惚り兼て振放ちつて逃出手を

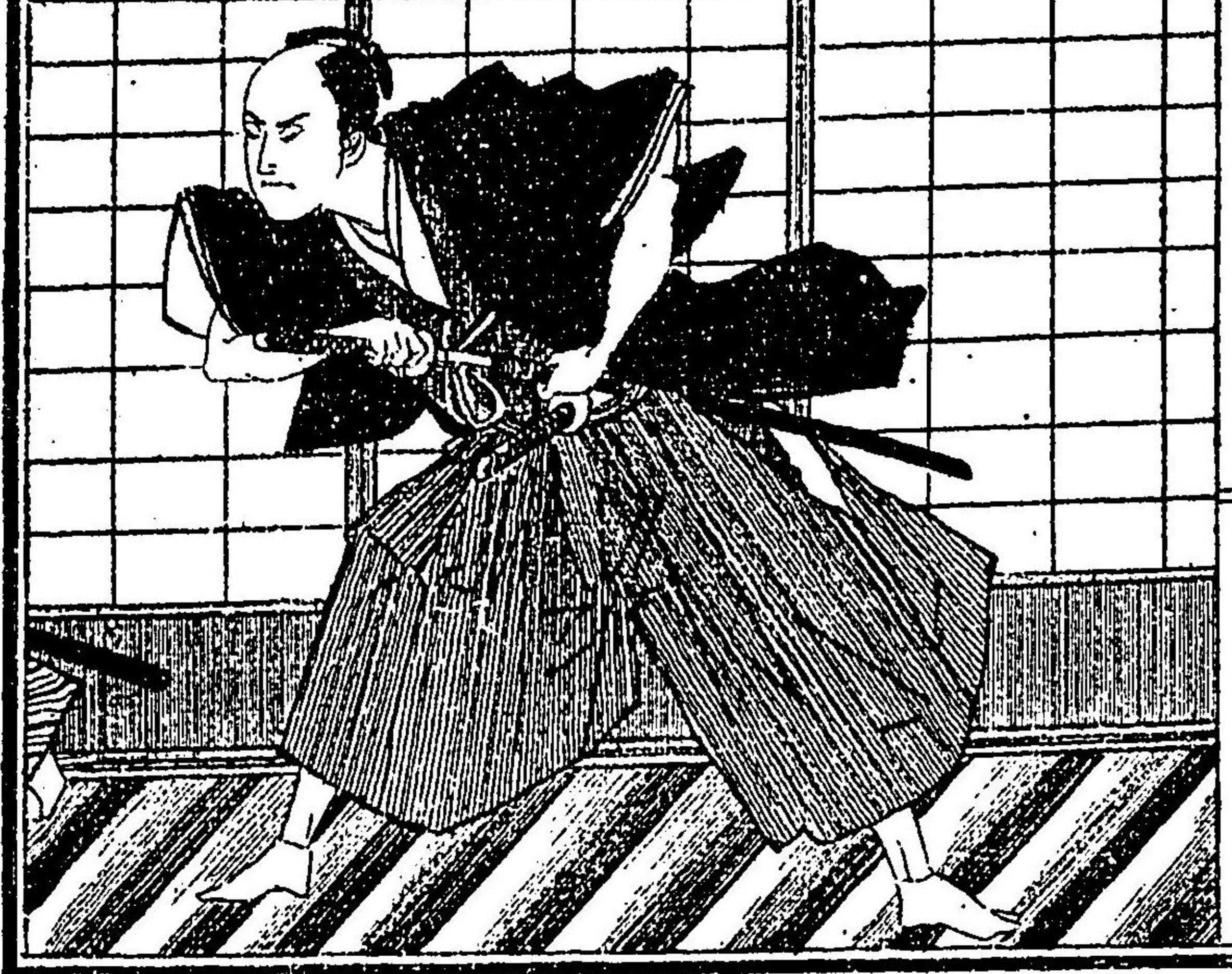


長盛藏人
爲十郎を
落す回

藏人透さし抜打一喝竹ぶ声と等しく作助
の細首打落しなげ敵ハ撞り倒れたりけり
人家臣も言度して作助の衣服を脱把せ爲十
郎が衣服も着爰て此も些も風説をべり
と禁口な一首級を携へ直り殿中へ出
仕をて若殿の御前罷り出敷命難く
浮田爲十郎切腹致させ介信仕り首も致して
尊覧も入る卒御実檢も指しけれハ満元
得も不便と思はれ怒りを治めて面を和け共
方小任し置処おれハ向後ハ宜小計らへと
せらる藏人辱なき御請申して御前退出し
て弟も帰り馳て浮田傳五右工門を招くる傳
五右工門急ぎ入來おせハ藏人開室も招き入
て一伍一什を話説爲十郎の身代りとして介
面貌の似たるを倅倅も若黨作助の首打落し
御前表を濟せしとまで言竊も打噴きて此計
ひハ某介許の外管口外致されまると密謀



禁口して再云様作助の亡體は子息の衣服を
 已把替着たるあれは介許の方の召仕ひまで
 も之を子息と欺計給へ則ち届て送りせんよ
 云て残る方なき仁義の計ひは傳五右工門感
 拜して涙を流し助け難き孩児の命十死一
 生を保つと此も作助の死も不便あれど
 命せよ隨ひ包を秘して妻子召仕ひへも申せ
 べぐらば慈恩氏神ありも尊しとて歎ふこと
 限りもあく深く拜謝して引把つて妻子の嘆
 きを呵り喻し介夜香學院へと昇行て厚く吊
 ひ葬りける然バ傳五右工門ハ介詞を守り所
 妻孫兒民助までも一言半句實を語ら長盛職
 人の仁美も感じ生涯口外なきりける
 恚て年先ハ且暮を追て奔下流の水の如く
 春去秋来りて介年も早冬の半を迎ひし処
 浮田の家ハ傳五右工門の外妻子下人の男
 女までも為十郎ハ御咎を受て切服もて泉



しと思へバ上下常打まりて暮したりけり
 茲は彼大館七郎右工門義廉橋左邊之助の両
 個ハ浮田を謀つて朝日丸を偷と密に挿動を
 窺ひ処ハ長盛介紛失の風説を傳めて浮田切
 服後ハ那の様なく詮駁の條も看せざりけり
 此此兩個ハ疾持脚にて藏人の心裡を計り兼
 て甚だ快くも打過けり夫不才の的ハ人を
 朝り替術到らぬ的ハ人を嫉むと宣成哉大館
 七郎右工門ハ己を人の上と立んと欲し驕慢
 貪婪の白痴あれバ頃日よてハ門弟の的へ類
 小浮田を悪く誘りて潔五百貫の禄を食り師
 範の家へ修るとして老年の本幸那輝程有ん
 孩児為十郎の仕越とても師範頼が鼻よ出て
 御用懈怠の過失なせり是処謂陰陽師の躬の
 上知も師の家は生れし躬ハ尚不意不時の
 要懐せざれば恚の如きまの不覚出来べし
 隣も老てハ驚馬は劣ると傳五右工門の武術

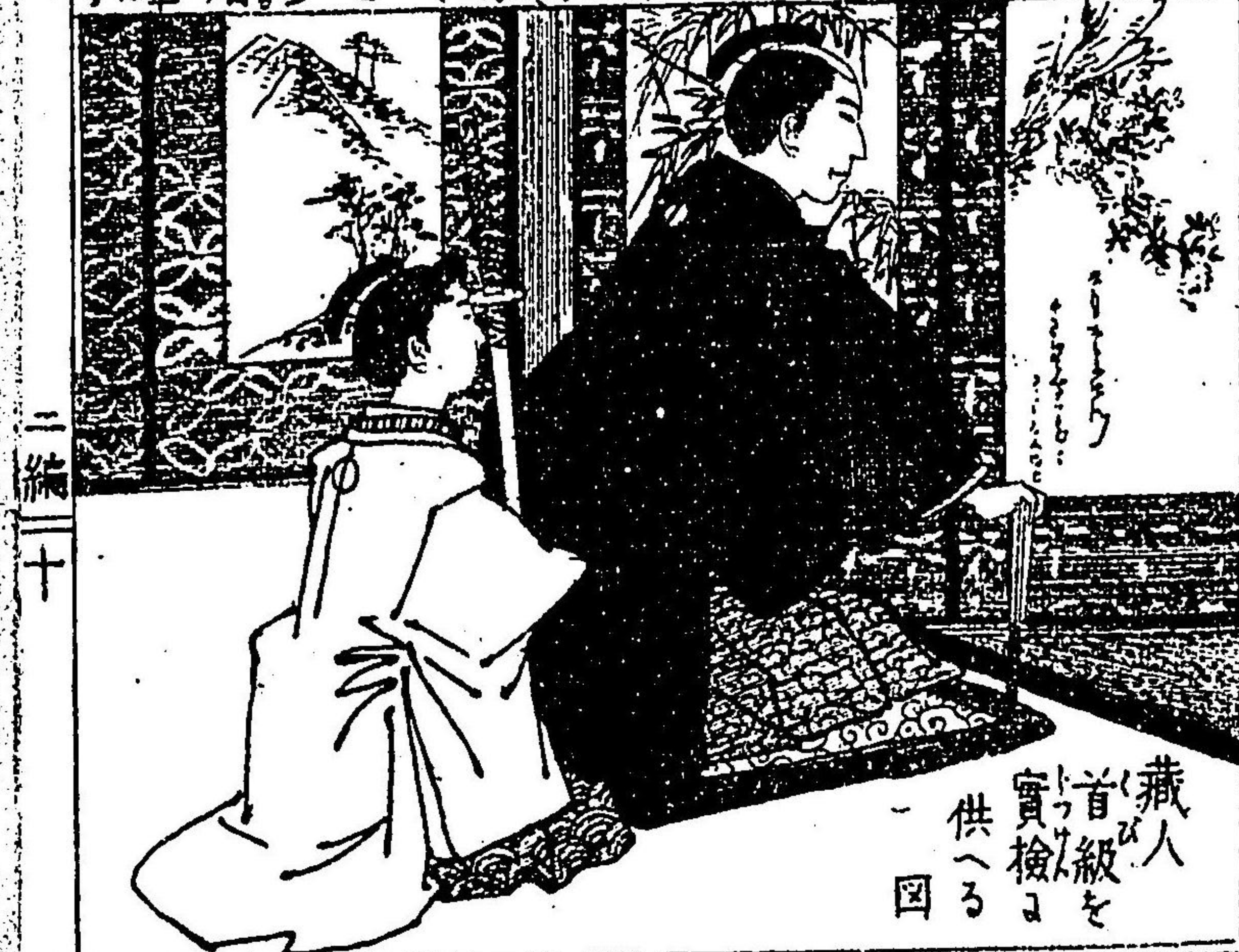


藏人
 作助の
 首を切て
 為十郎の
 偽首と
 為す因

の程も子息の縁けり想像るく縁が戻ると看
ゆる物りし故々想口言觸しければ浮田の門
弟之を聴て傳五右工門の耳へ告れハ流石老
人の辨少へ怒りを恐ひ合着もせし衆置たり
大館尚も憐慢強く一時主君の御前も出て若
殿へ願ひて云ける様茶恩祿を頂戴仕り藩中
師範を命せ付らるゝ君恩報じ賜され候
同藩亦甲乙争ひ小あふねど其門外の人小
ハ誓古励学の一端少ハ万気流義剣法の餘を
誠合見物仕りたり伴傍浮田氏も御師範へ向
門敷多藩中も有て向後出稽の矩模もなれ
ハ大守へ御願ひ下されて哀れ御免許の儀も
之あふハ有難く見物せんとして某辞退中様
ハ浮田氏ハ老練の達人へ大館なりの未熟を
以ハ争速ぶべき人小非やと屢辞退を申す
雖も達て御誠合を憑入りて其促めり
事日毎へ一応御主君へ伺ふて後御停止有ハ



諦め給へ倘御免許を蒙る則ハ君より浮田氏
へ御錠下され不屑あるが七郎右工門も誠合
仕らんと兼諾して止事を得て伺奉りぬ併
ぐ俺君の御賢慮まで奈何し思ひ召給ふ
よ於ハ某門人へ公旨を申て処望止させ申す
べしとて人も憑まぬ歴計言を藩中も負せて
實明らし詞計狡ま言止あける心表こそ
不敵へけり若殿満元聴し召つ諸藩臣の処
望の旨ハ武警励みの一般と云最もの儀小顧
ふあれハ奈何も誠合免許をべし然らば明
後霜月十六日此殿外の廣庭にて双方誠合致
せり浮田方へハ使節を遣り早速申し
付るへ退出して門人們へも告知せし命せ
ければ大館深く恐悦して心裡仕済たり上
笑を含み御前を退き弟小降りて高茶橋を始
めとして諸門第へも恚し知せの門人四五輩
を呼集へて七郎右工門後願は詰りけるハ今



藏人 首級を 實檢日 供へる 圖

日御前にて簡様と如此に言上ありて已が傍ある辨口を告て備至君後日尋ね給ハ門下一紙余答へ下さるべし余へ各士より傳口仕給へ某恐らくハ明後日の試合九歩ハ勝べき思ふ外ハ傳五右工門老練の功を以音大館を慢り控んど小児を應ふ事止あらん外を此方余虚を外さハ廣の試合の勝負なれば用捨なく附込對ハ必定勝を把べき物り今まで浮田良貞の若殿原某粗耳轉りも兼ハ有ハ故意各士の処望と披露し惣ハ言上ありけることと語れば余々兼諾して夫ハ一段の見物にて侍へ然こ子御手際目覚しくゆめとやた追従速て前祝と号け酒宴を設けて玉勝巡師兼余定日を等たりける惣て浮田方ハ大守より御使節として浮田の門弟御近習役を勤めたりける森本三之丞と云る壯士八米して御下知を迷ぬ傳五右



工門ハ好しうりぬ共主命辞退し便もあけられ畏り奉る旨返答して森本を帰して余鳥を等たり此時彼奴僕鹿藏ハ拙者万乞御供を許され大守御上覽恐れ侍へ共速く侍りて御談合を拜見の儀希ひ奉りぬと亦余儀もあく望まければ傳五右工門ハ是を許して倍臣殿内へハ入難けれども長盛殿まで願ひの上りて免許を受ふ見物せよとて主の詞は鹿藏ハ飲ひ余鳥ハ供も干属添出けり



然程は定日霜月十六日音川御城中殿内ハ浮田大館の叙道誠合上覽命せ付られける小一藩中の諸士ハ云も速バギ双方門弟の若殿原まで此誠合を見物せんとて會早朝より参殿して大廣室なる操場なる内外ハ余役々の甲乙を正して各士詰懸て列席キ大守



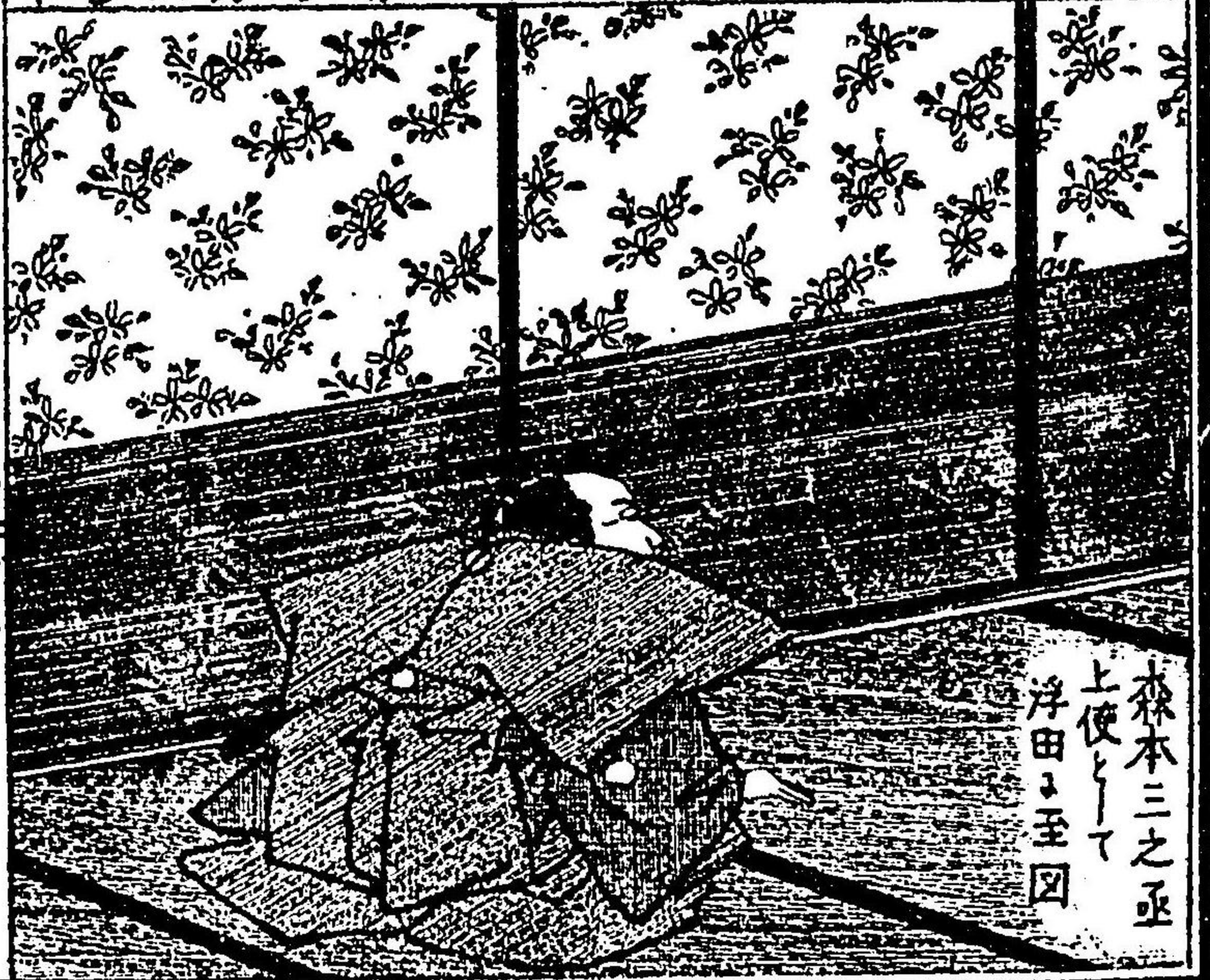
大館 七郎右門 叙術試合を申出る因

若殿満元ハ上段の室ニ翠簾を捲げさせ
 従茶坊主を後方ニ侍らせ翠簾の外ハ老臣
 の面々且長盛藏人を始めとして左嶋監物金
 川忠大夫徳永弥十郎の此四個ハ他家第一の
 家老職ニ次リ御用人浅山主水之助尾形龍
 左衛門富本源太兵衛を始め御近習御庭役衆
 階々として居列びたり御椽側の下左右ハ
 御らちの衆中諸役の侍士草席を敷て見物免
 さる御廣庭築地の塀際ハ御紋着の幕を打
 せて諾嚴重きぞ備へられたり早介刻限も
 速びければ大館七郎右工門義廉ハ上下礼服
 着て罷り出大守の方へ低頭平身此方の草
 席の上ニ着座してけり積きて浮田傳五右工
 門も上下礼服して歩行出大守の方へ低頭平
 伏して左の方なる草席の上ニ蹲踞して御指
 揮を等ぬ此朝傳五右工門ハ執事長盛藏
 人へ願ひて奴僕御坪の裡推参の処を老人歩



森本三之丞
上使として
浮田至因

行介添と鉢へて密ニ伺ひ申ければ藏人容易
 之を許して介許老鉢介添たハ速慮あり
 卒入るべしとて馳て大守へ言上せしハ満
 元も異かく許し給ふ傳五右工門有難
 して此時鹿藏を後方ニ俣して彼草席ニ蹲踞
 居る大守よりハ青侍小令せて木刀二振を庭
 上小直させ双方準備を促し給ふ然る小近習
 役の中よりして掃左近之助進ニ出鹿藏を看
 て大さる不審浮田主役を召めて云様御殿
 内坪の裡ハ倍臣たる的ハ出入なふぬ者
 れハ貴殿下郎の的を御前問進く召卒られ
 ハ近習御家法を蔑みかそ我終なる奉止と存
 侍心誰ニ断りて卒られたるや寛怠至極と
 詰り問ハ長盛藏人は是を制めて否介答ハ此方
 聞届けたり老鉢歩行不便利小就て下僕一個
 介添許されたり御前言上已ハ梓濟せり各り
 りるハ速ハと云ハ左近之助ハ老

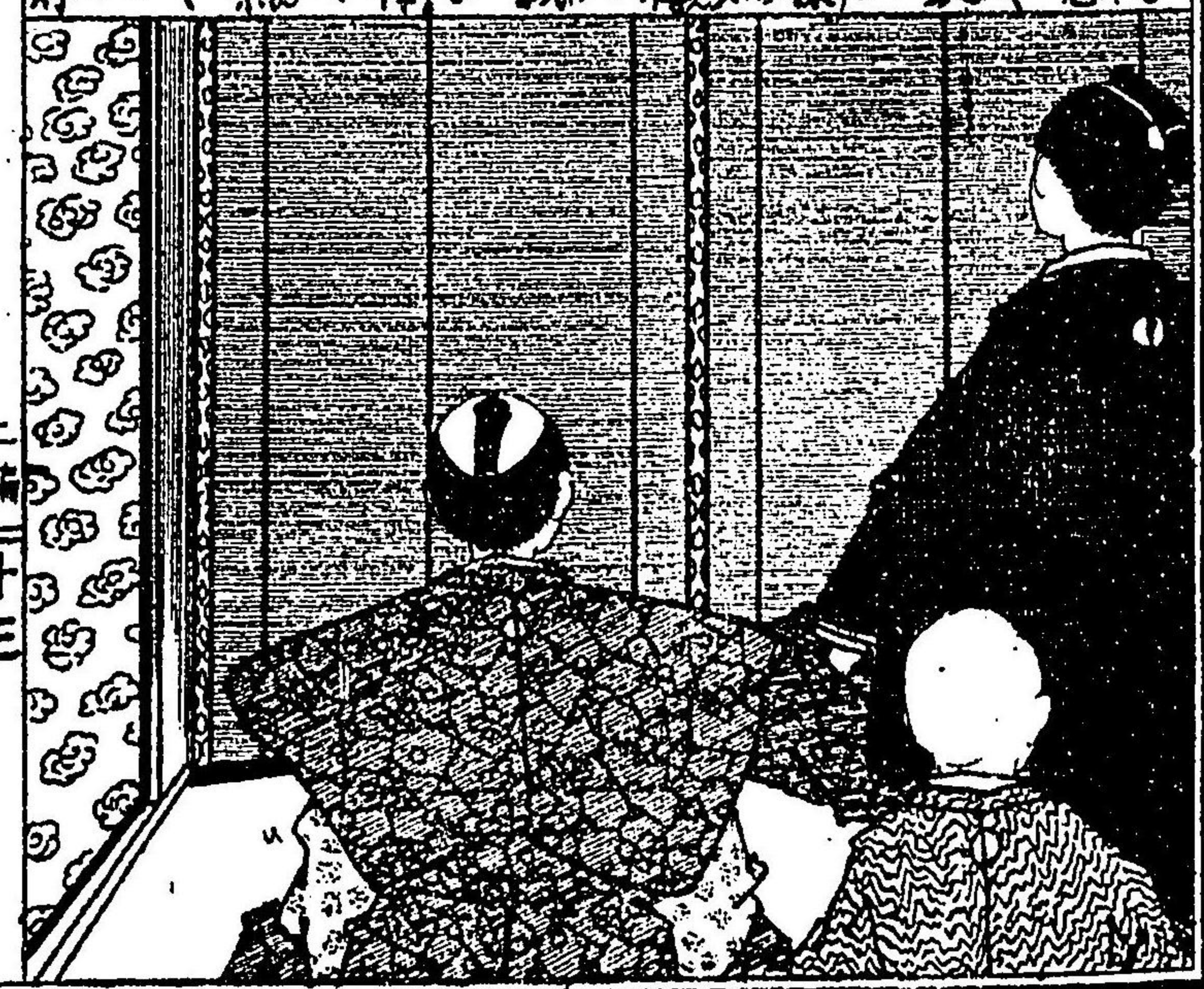


り出て結句は赤面の体ありしは鹿蔵ハ差
 低きあぐり可笑き忍び吹出して故意咳して
 打紛らしける那うなりの眼の橋ハ倍と看傳
 り声を暴らげ是ハ不札ハ其カ下郎汝那をり
 嘲笑ひたるや不埒千万と呵着けれハ傳五右
 工門鹿蔵を呵りて立ちよと言付れハ大守
 適ハ御覽しつ森本三之丞を以命せけるハ
 是や浮田の奴僕の的苦い小なら其処小
 居るべし余方劍道の家ハ仕へハ定めて然し
 ハ心得有べし何も時の一奥なるべし一手合
 して看せ侍へ師範と師範の談合の外ハ習字
 の的を打對さずも亦是勵みの一固と思ふハ
 非除負る共耻ハあると此議奈何と命せ下
 りぬ誰なりとも相敵となして且前ハ談合致
 すべきと思ひも奇ざる御鏡下さるハ傳五右
 工門ハ打駭きて只顧是を辞退けれハして大
 守ハ頻ハ勤め給ふ此時鹿蔵進出下曰様早



満元公
 劍術試合
 上覽ノ
 圖

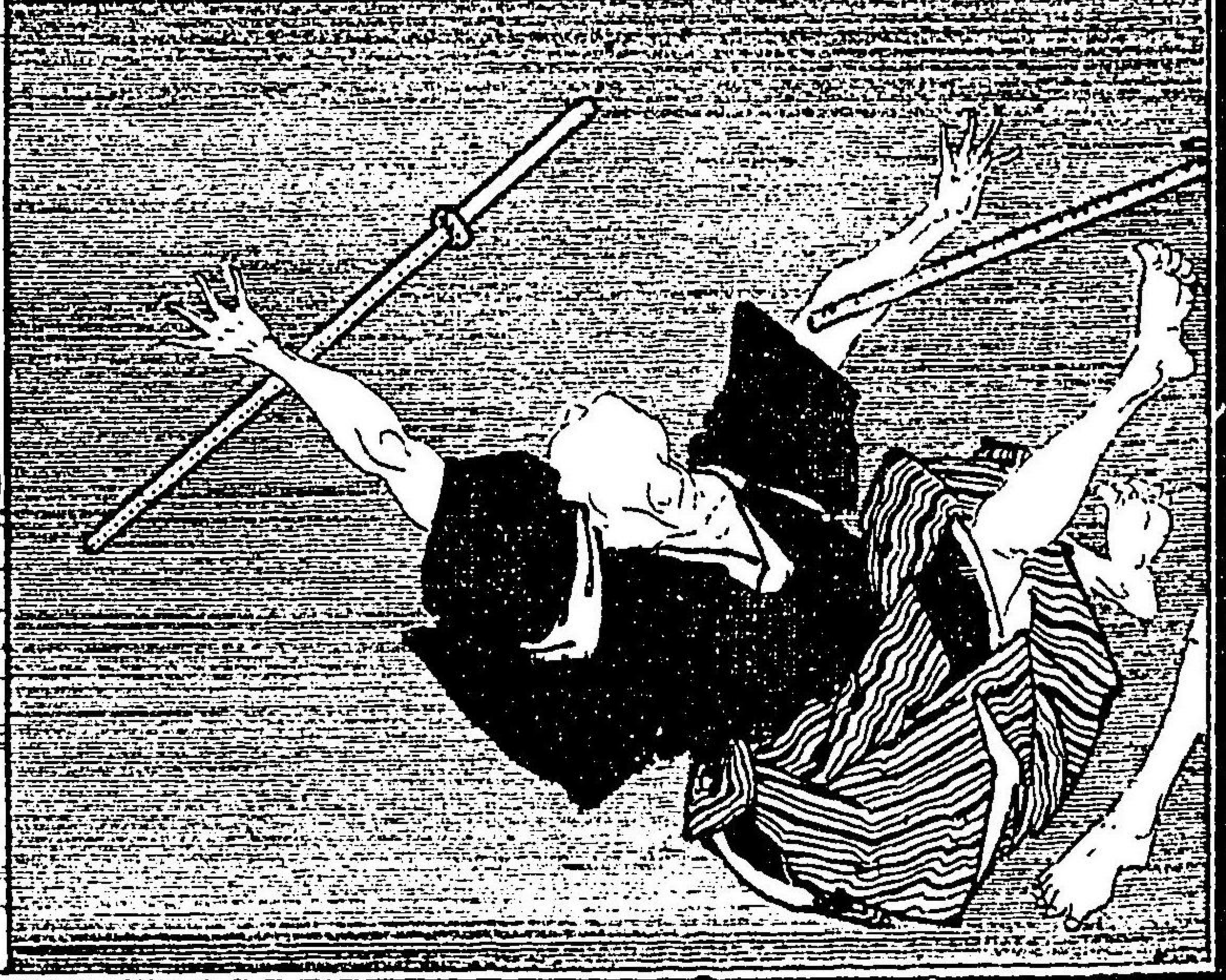
劣の下郎推参仕るさへ恐れ多き処ハ侍小を
 未学の拙者へ談合の儀ハ意外の御鏡大迷惑
 仕りぬ然もさう達て違背致さハ御意を損
 る恐れも侍小主人教意の処も業ハハ御鏡
 小隨ハ奉るべしとめを憶せや御請ふとハ
 橋左近之助心ハ憤却し再び進出申す様
 ハ一文奴の大膽の返答なる井蛙の分際得知
 ぬ某相敵と成て違ハキべハ大館の高弟木傳
 流の印可を受たる橋左近之助の相敵なるハ
 余方ハ生涯の幸甚たり灯燈ハ釣鐘の此談
 合能ハ心小得さキべハ卒準備せよと云よ
 り疾く飛亂離と撥側飛下りて下緒を金で禱
 ハ懸別ハ木刀把寄身構へたり鹿蔵も御前ハ
 一揖して橋へも致禮を述べ禱も懸キ單然
 として木刀拿て身構へける上下是ハ面白
 と瞳を定め余膝を進めて見物キ左近之助ハ
 鹿蔵曰く奈何ハ下郎鹿蔵とやハ囁の御前



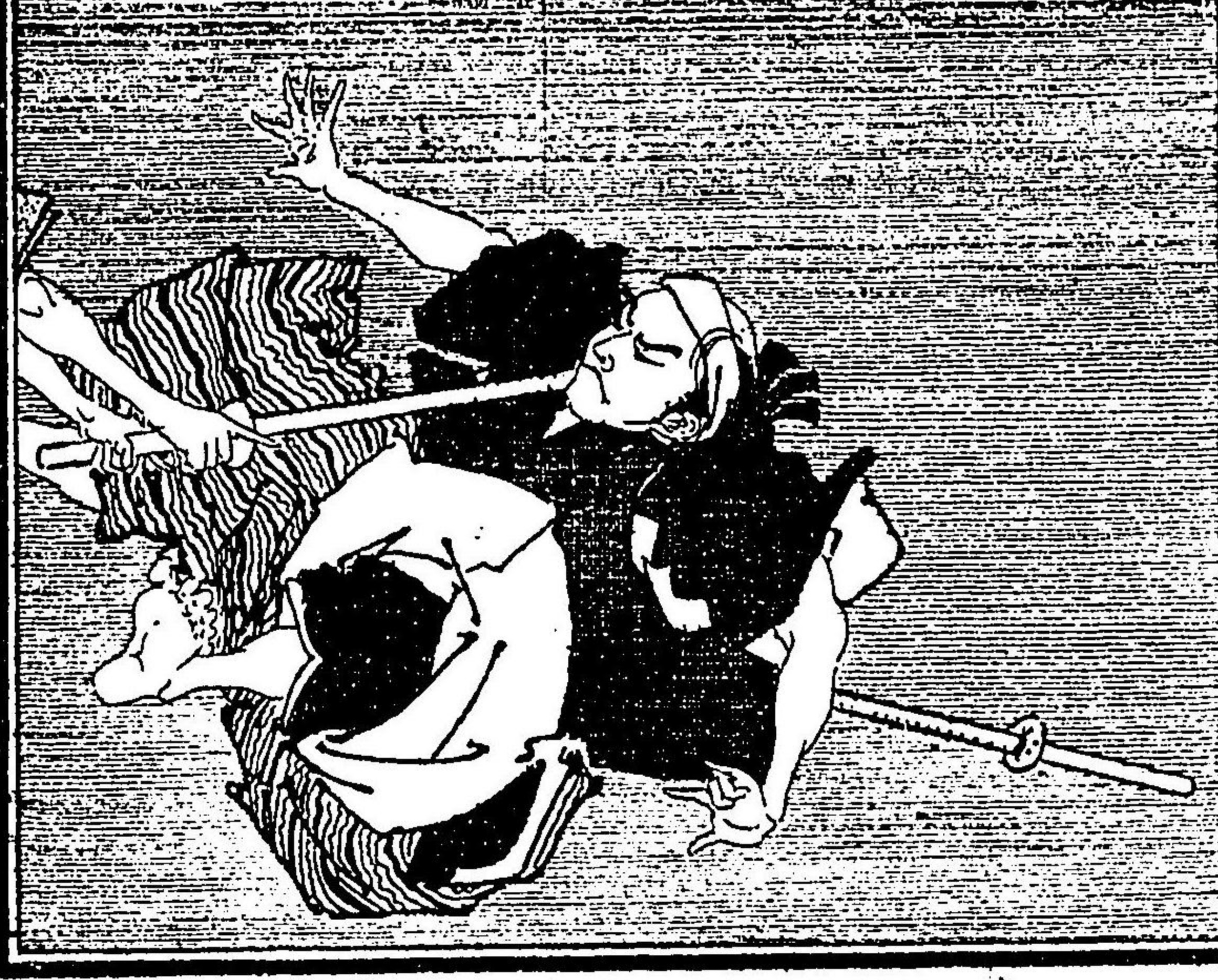
の誠合ありハ俺用捨ハ決して為まらば少々中
 の強く有とも管々俺を怨むべしと云々無價
 ハ惠まざれば一挙受むバ声を懸るも飽まで
 廣言吐出せバ鹿藏完示打笑ひて夫ハ下郎と
 ても同ト云々疎恣ハ御用捨下さるべしと云
 左近之助愈憤りて卒と云々對ひ合し双方
 透を考へ討込ハ鹿藏の木刀ハ眼を速ら天
 姓異なる武術の利術打りと者バ左右に開き
 開くと頼へバ振込勢ハ利縮斐の光る如く
 總十合と戦ハギして左近之助の木刀剣落し
 是ハと周章左近之助の股へ木刀懸る者へ
 一が颯と剣上る余力量は踏立両足地を放さ
 れて貞計を打て撞地例れ仰向ハ平張たりし
 ハ恰ら泥龜の轉りし如く見苦しくりける形
 勢ハ殿上殿下声を揃へて仕たりしとの讀
 る声音ハ霎時ハ鳴も止まりける鹿藏もつと
 頭を下て左近之助の傍に倚て何処も御怪我



ハあざれや失敬御免と詫まければ左近之
 助ハ砂打除ひて頬張らし物をも云々唇
 程もあまき腕を肩まゝ衆人の者る前目な
 くや越殿電なぐ幕の外へ木刀杖ふ着て逃
 て入大館七郎右工門ハ之を見て深く鹿藏を
 恐れけるが橋の耻辱ハ俺誠合まで目も物者
 ぜんといふ思ひて後鉢巻王釋して袴の裾を
 高く擡げ除々と動き寄バ傳五右工門も同じ
 後鉢巻めまよやうは歩行寄まき是ぞ今日
 の噴術へと上下斤端を吞で見物キ互小式札
 して木刀握り浮田ハ神影流の達人大館ハ木
 傳流の達人ハ然ども傳五右工門ハ當年積つ
 て六十才の老人へけり大館ハ未だ齡若くて
 今年三十五才とありぬ裏老壯健甲乙論ぜバ
 七歩ハ大館の勝と思ひれ鹿藏も常盤は汗を
 振りて御至思ひは氣ハ不覚ある天暗勝を得
 給へりしと瞬きもせび守り詰て一向余念ハ



有ざりけり己は双方立上りて大館木刀真
 向小振上面上徹屋と打下せば浮田心得清服
 受流し衝入木刀飛鳥の如く金鏡きも服も
 速ハ弱々しく者へし老躰も茲に到つて身
 程き働きハ梢を傳小懸り波を浴れる玄鳥よ
 似たり大館も亦然的なれば同く木刀電光と
 揮ひ打バ開き外せば衝込双方手練の歴々實
 々數年の精術心を竭して九半時計り排ミけ
 れバ衆人ハ帝醉るが如く食息もせひ守り誥
 たりけり大館剛光の癖者るれども動もせず
 浮田の木刀は打握れんとなきまきよく精神
 腦亂して心躰勞れ思ハギ卒筆受弱とされバ
 浮田透きびやと懸て大館が右の腮先觸へ
 懸て丁と打込拳の力量ハ五躰は徹してさし
 もの大館眼曇りて大の敵も後居は撞地平伏
 へたりけり傳五右工門の此働きて大守を



始め家士一統は噫仕たり者事と讀る声ハ殿
 中小喚りて奮々たり浮田ハ大館よ心を添て
 此方へ歩行て休職キ大守ハ馳て両士を召れ
 自ら命せ下さる様ハ勝負ハ時の運と云ハ藝
 の高拙ハ就べくは向後双方意恨を遺き
 キ忠勤こそ肝要へとて浮田へハ御褒賞を賜
 かりせ座の面目施しければ大館ハ整衽唇よ
 り云出て負を把たる此為体は只管大赤面し
 て御前を退き病氣と云立引懸りて人小面ハ
 對きいりける傳五右工門も俺弟は帰り今日
 の手柄を打語りて且鹿藏の武藝を称讚し汝
 今日の大刀條を視るも中々容易の本事は思
 ハギ數年習練する事術見ハるハ那人は就て習
 ひ得たるや天晴者拳し働きへとて深く公術
 賞美せしうハ鹿藏ハ帝何と云中拙キ本事
 御目よふれて御笑ひ索め候物ら誰しも習ひ
 申は非ギ御門人方御誓古の節童見馴者覚へ



の盗三誓古縁の人真似えせ為処は候と辞儀
 の返答は傳五右工門ハ尚々感して我子の如
 く念めで罷て仕ひつゝ俺服心の良僕へと
 て飲ぶに限り無り然バ自是浮田の方へハ
 藩中の人氣打傾きて門人と成的愈々大館
 へ通ひしめまでも大半入門して流儀を学び
 繁昌日増は賑ひけるぞ大館七郎右工門ハ
 密に嫉み或ひハ憤りて思惟ける様俺浮田奴
 を誅合する勝るバ独師範の出頭をべしと望
 し幸ハ画餅と成て渠奴は徳着しこそ残念
 けり此恨如何ぞバ暗多んと齒を喰まはり
 て怒りける時節橋元近之助も彼鹿藏が為
 打負たる無念口惜み胸小溢れて大館の病氣
 見舞として入來して容子を訪へバ七郎右工
 門ハ大さく飲ひ閑室に請じて申ける様某病
 氣と云バ虚謀之實ハ浮田は打負一藩中へ面
 目を失ふ轉末をれば足下ハ俺為の子房孔明



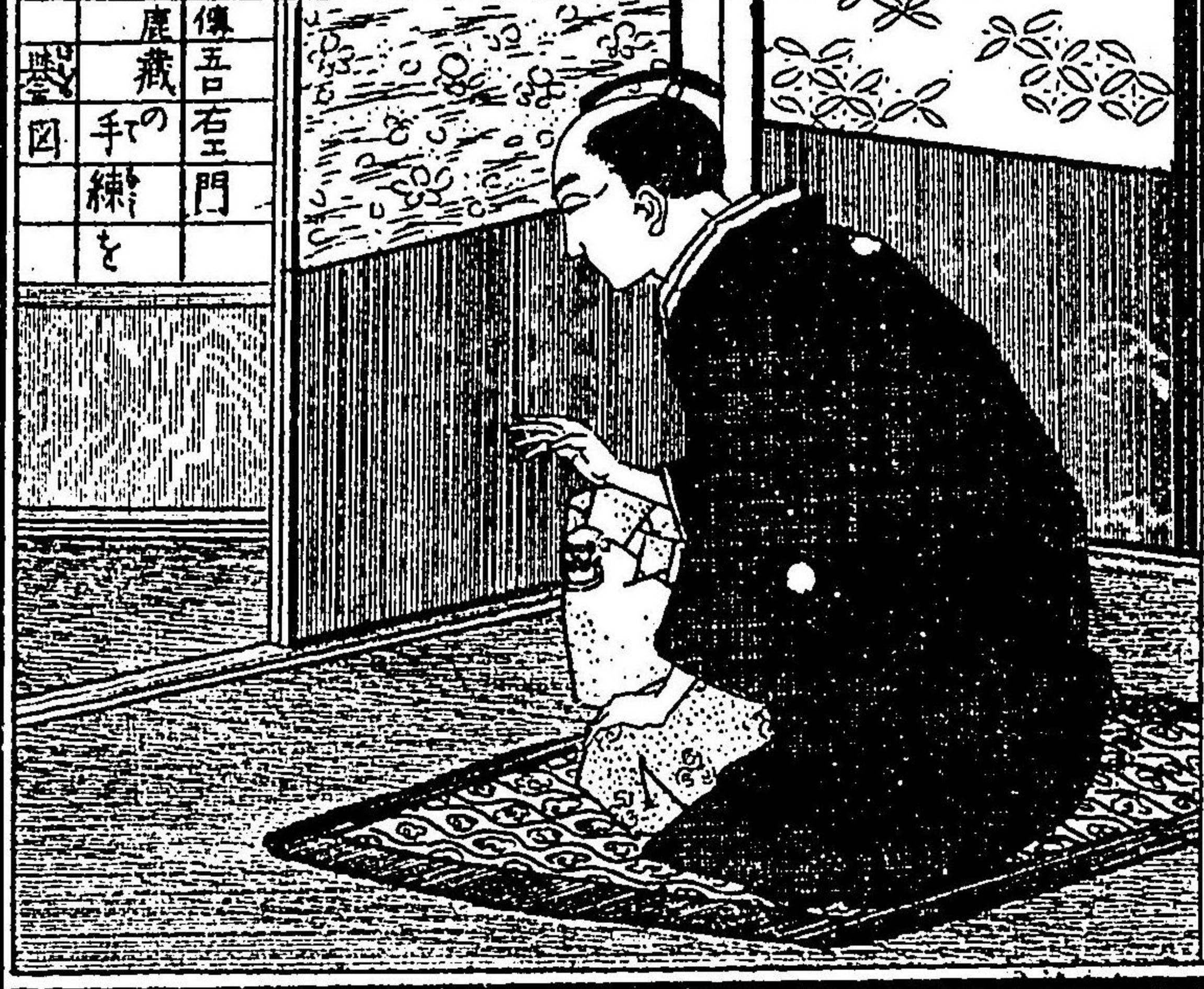
満元公 浮田大 館向 士二論

と思ふ良策智計も有るふバ此のつふんを
 暗手手段ハ無や教へ給へと望みければ先
 之助ハ是を聞より掌を拍て大さく飲ひ先生
 の命せまでも多く某も彼一文奴の爲に満屋
 乃中もて不覚を把て心外云様も侍ハギ
 渠奴們向後面を對さバ必定俺們を變り朝
 尚耻辱受ると多るべし連も渠奴們は笑ハ
 れんも速に暗討は多して俺師弟の怨を
 暗きんら頃日寒夜の時節もれバ浮田ハ老
 親父の故夜中便処へ通ハ必せり此時を
 窺ひ竊ひ入殺害をさバ奈何と云バ大館笑を
 含みて云ける様夫ハ能こそ心着れたり然
 足下も同心致さるや橋元も敢て打点頭
 然に某は於も下郎鹿藏の時宜は就バ俱に打
 泉してつづ人敬上度候に況や師近の御為
 加勢なキハ此方望む処小侍ふこと勢合んで
 答へければ大館はよく打飲ひて然らば明



勝負の 怨も 図む

夜寝ひ入て双方意根を暗そべしと互に手苦
を約定なす橘ハ己が弟へ立寄りける于
時応永七年庚辰十二月朔日大館橘ハ益より
會合して今夜の準備をなしたりけり今晩冬
の寒氣強く水ハ氷りて當の如く霜ハ草木ま
宿りて鏡ニ似たり今日昼より霽降て夜に到
れハ倍寒して物更の刺より大雪と成ぬ然程
ハ大館七郎右工門ハ弟子橘と謀り合して寒
氣大雪も厭ハドミテ鎧繩の準備して竊ひ出
たや二更も迫着刻浮田の弟背門口へ了
ハそと竊ひ伺て鎧繩把出して堀の家根へ飛
乱離と振懸兩個共難なく裡へ衆踰けれハ雪
ハ倍小止もなくて平一面白妙の夜ハ朝日の
暗も雪の光家の隅々隈々までも自然是ま
明たりけり兩個互に聲を合て処もろくた
音廻しける浴室と厠の棟續き通ハ竹椽
音へけるもぞ搦喚きて云ける様ハ至此處へ



傳五右工門
鹿藏の
手練を

来るハ必定へ先生ハ浴室へ竊ひ給へ某ハ椽
の下屈まんとして上下別れて躬を躲しぬ
噫危哉傳五右工門ハ今甲夜積れる雪より
前ハ二兎の及ハ躬を失ふて茲ハ消なん王の
緒共神なるぬ躬の察るよもしなく災眼前ま
迫まりけるハ實ハ前業の因果あるべし既ま
今夜も子の刻過て水も寝入ぬ己の上刺水火
既済の數尽たる音なき雪而已積れる時節傳
五右工門ハ老の故ひよて便処の用を達せん
とて自ら手燭を携へて武士の嗜ミ小刀一
腰帶を跨ぎ兩戸を押開竹椽の方へと來懸り
て庭面の雪を打瞻めて曰く借も降たり此雪
よ冷厳しきも理へとて独言たる余声音ハ子
紛ふりたなき傳五右工門と思へハ大館浴室
を飛出意根今こそ躬を覺へよやと声請共よ
見く一刀脇深く斬付たりける不意の物手よ
て傳五右工門ハ駭きながら躬をうらして小



刀推乱離と扯抜つて打込刀を受流し那奴な
 れバ此狼藉比奥より欺計打つて服立しや闇
 宅の的起ると呼ひけり左近之助ハ縁の下よ
 り半身出して刀を掌に拿傳五右工門の左の
 大股力に乗じて刺貫けバ傳五右工門ハ片脚
 縫れて氣ハ張詰ても二ら処の重庚より起居
 せギ伏傳ひし寝るが大館の刀受流し頻
 る人を呼立たりける大館奇つて衝込々々思
 呼らぎと疾くだたれとて上段より振込刀小
 右の腕打落せしうバ那うハ以惚るべきやハ
 さしも銀道の達人なれと利腕落され仰又伏
 て余息ハ絶景ふける闇宅呼立主人の声よ
 民助母子を始めとして奴僕炊辛の輩までも
 倉々卧室を剣起つて那群をふんと噪きたる
 う刀を帯よと狼狽廻り中よも次男民助ハ父
 の声音ハ空間の外ぞ疾免付やと呼らりて追
 拿刀よて立出れバ父傳五右工門ハ竹縁の上

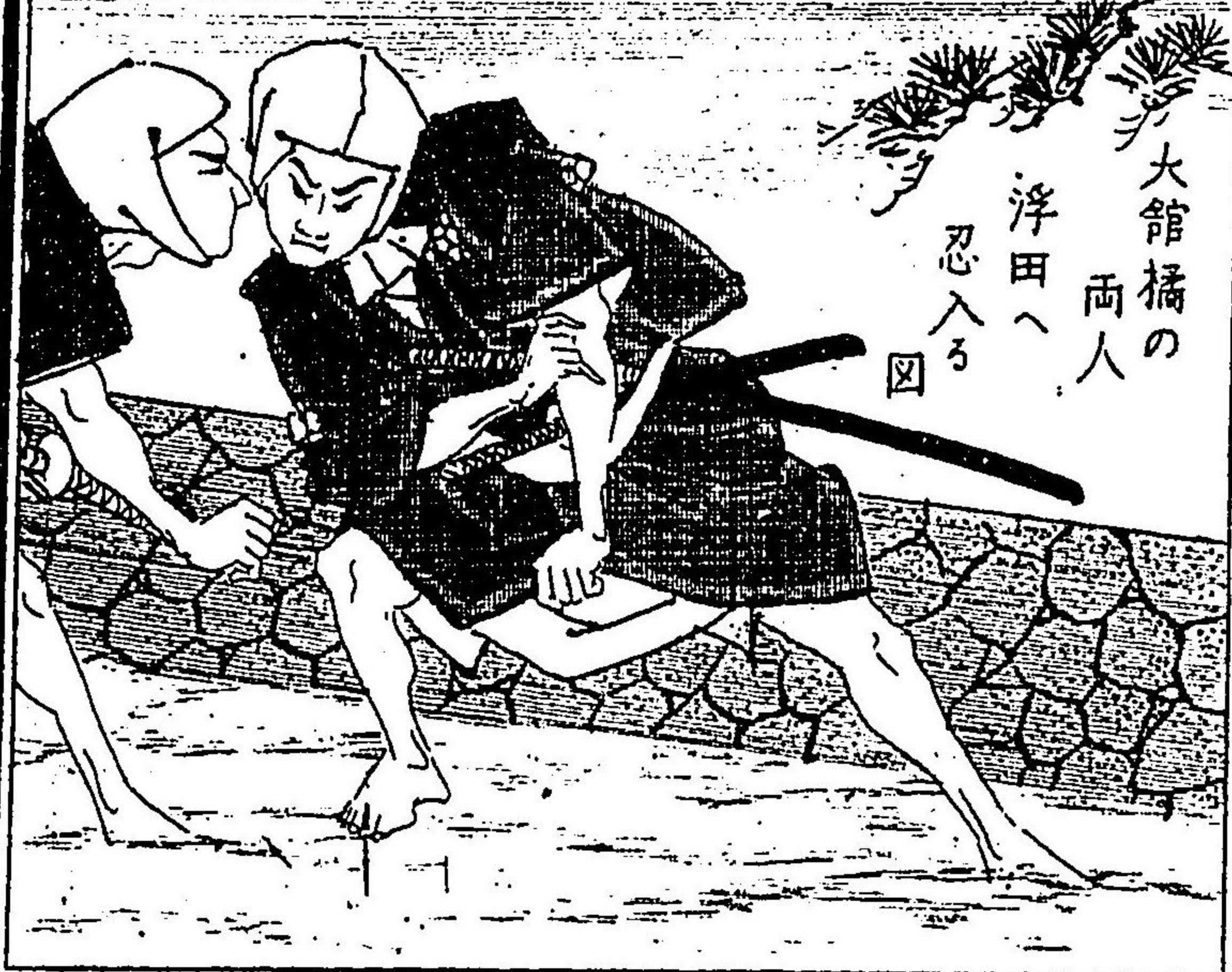


大館橘の兩人
 傳五右工門を
 殺害せんと計図

小今や斬伏られし形勢ありハ民助却然と
 て刀を扯抜兇賊適さしと斬て懸る徳と視る
 より左近之助ハ縁の下より踊り出つて手水
 鉢の根は有ける碁乱太を掴みて民助目懸て
 磔とらして撃着れバ大館得たりと刀を振込
 帖に係つて斬入けるも青年茲は十九才の
 壯士銀道熟達るもハ雖も奈何ぞ大館もハ
 股ふべきや暴兇無慙との太刀條もハ音斬立
 られて己は危く着へたる処へ奴僕鹿藏ハ
 灯燈引提て大官人ハ何方小御在や那と奔り
 て侍心ぞと呼らりて下子舎より中を苑り
 て來りければ左近之助碁乱太を飛して鹿藏
 の侍たる燈燈へ礮と斬付火を消たり原來奸
 賊入たるよと雪の明りも容を省して衝と走
 寄て左近之助の投付礮を飛乱離とくハし無
 手と引組繼上て金剛力よ披き上たる一喝叫
 ぶ声と共小泉水の際ある石を目的は肯も碎

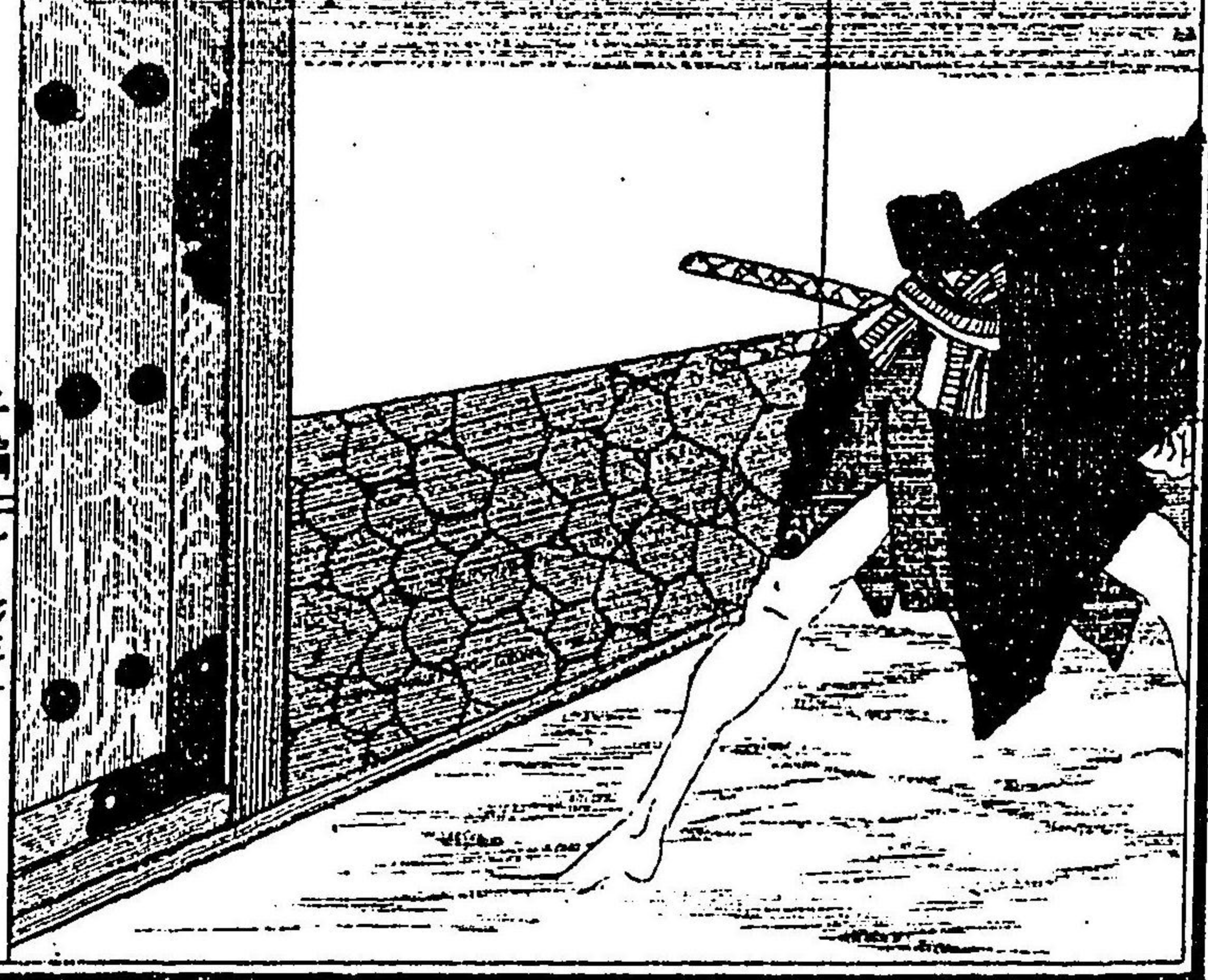


けと投付ければ、余大力の勢ひよ、左近之助
 石の尖まで、臍骨を撃破られて、苦と一声、鮮
 血吐出し、半身泉水へ、降り陸て、其場息絶
 死下り、噫、積悪の罰報過失、頼命を、把れ
 たる天の思ませ給ふ、現證へ、誰か知ん、是、劔
 の盜賊へ、爲十郎を、罪、陥したる、正、余、世人
 の、癖者、ある、は、浮田父子、是を、察、今、亦
 傳、五右工門を、殺害して、処、去、死、速、速、ひし
 は、是、思、中、の、一、幸、成、へ、然、バ、余、罪、惡、の、根、本、ハ
 大、館、一、個、の、躬、より、起、せ、バ、橘、の、躬、も、天、の、咎
 め、と、緩、め、給、ふ、処、と、思、ハ、る、善、惡、の、報、速
 速、有、是、ハ、人、智、を、以、察、キ、ベ、ク、ト、然、ル、者、
 現、證、現、罰、ハ、恐、る、べ、く、慎、む、べ、き、大、館、ハ、鹿、藏
 と、視、る、事、も、忽、ち、心、は、臆、し、た、り、け、ん、民、助、を
 余、終、棄、置、竹、椽、飛、下、芥、門、さ、し、後、を、も、視、キ
 菟、出、し、け、れ、バ、已、比、奧、之、癖、者、奴、父、の、怨、敵、外
 ハ、せ、と、て、民、助、声、振、絞、り、て、逐、懸、れ、バ、鹿、藏

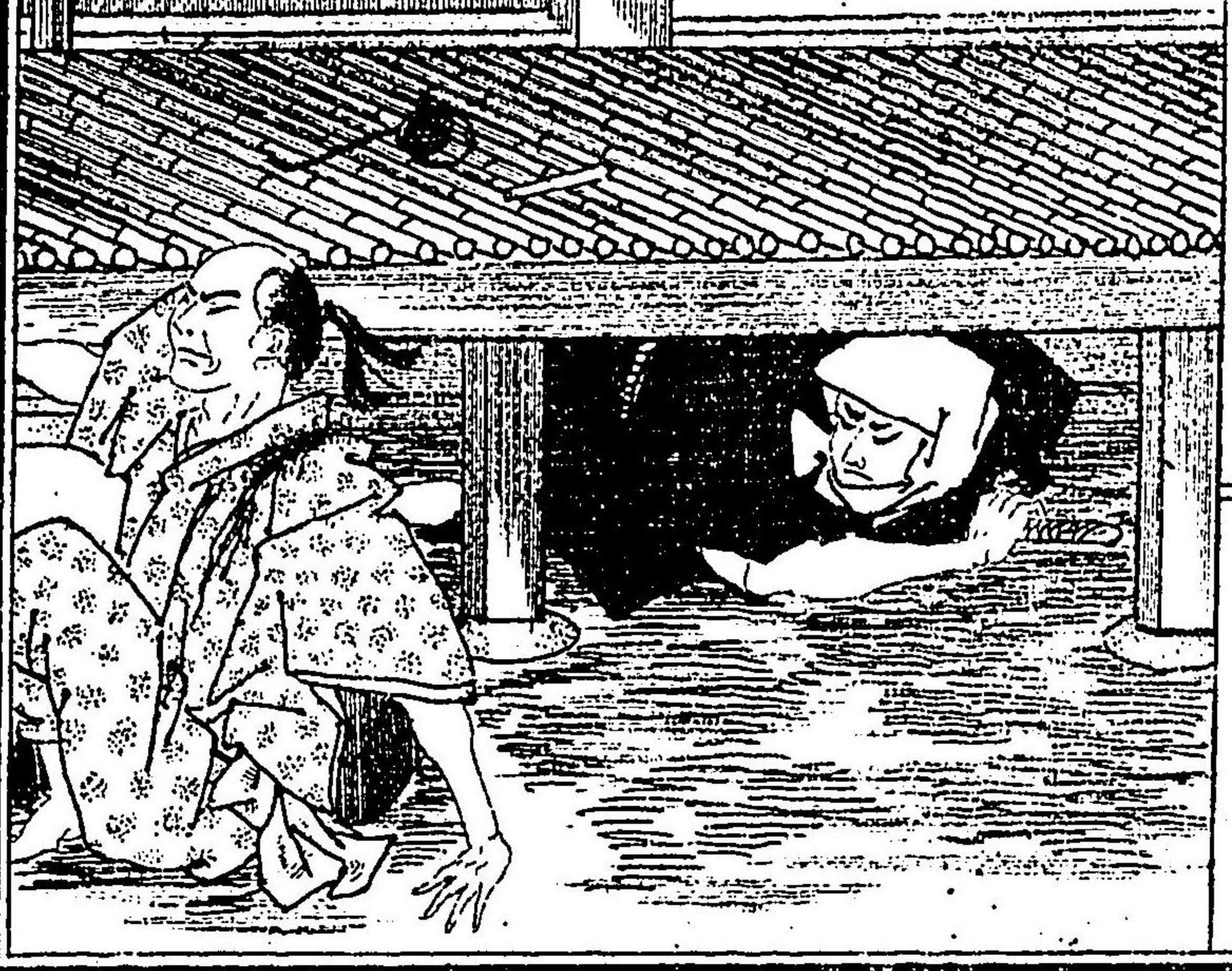


大館橘の
 兩人
 浮田へ
 忍入る
 因

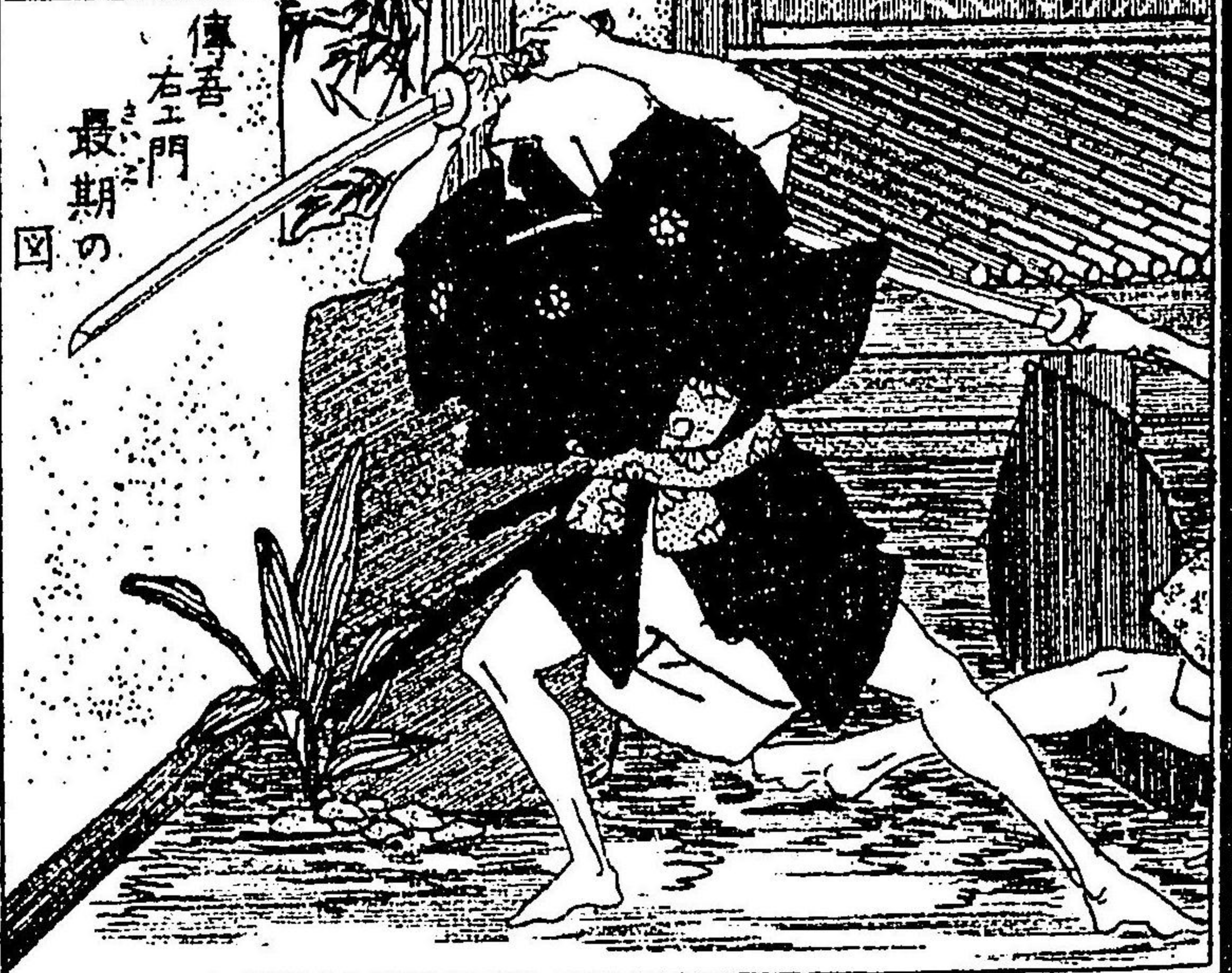
始めて打駭、那大官人を、や、害、ひ、侍、ふ、思、き、癖
 者、遁、き、ま、り、ト、ト、俱、は、續、き、て、逐、懸、れ、バ、大、館
 ハ、塀、換、上、り、て、竊、ひ、傳、し、の、竹、を、拿、り、堀、と、裡
 の、方、へ、刎、傳、し、て、民、助、鹿、藏、の、進、む、前、向、へ、是、を
 喰、へ、と、投、付、つ、堀、を、彼、方、へ、飛、下、り、て、深、雪、の
 中、を、脚、小、乗、し、開、を、便、と、逃、走、り、て、行、方、分、ら、ず
 成、たり、け、る、早、竟、民、助、主、従、此、癖、者、を、大、館、と、ヤ
 察、る、や、否、や、次、の、回、は、説、を、者、給、へ、り、
 七、回、鹿、藏、の、裁、心、浮、田、敵、討、の、供、立、話
 此、時、民、助、鹿、藏、們、ハ、芥、門、の、真、手、疾、く、外、し、て、大
 路、左、右、に、扯、別、れ、つ、癖、者、引、捕、へ、ん、と、逐、懸、し、
 が、終、り、行、方、を、着、失、ひ、て、雪、の、明、り、も、速、き、ハ、分
 ら、ず、尚、弟、の、裡、も、氣、遣、い、と、て、鹿、藏、ハ、前、小、把
 て、傳、し、俺、投、付、ら、る、癖、者、を、子、證、議、な、さん、と
 走、り、侍、て、引、起、し、つ、向、を、視、れ、バ、豈、顧、ハ、ん、や
 是、同、藩、中、な、る、橘、左、近、之、助、ま、て、有、け、れ、バ、鹿、藏
 茲、は、仰、天、あ、て、明、輩、の、奴、僕、を、呼、立、怨、敵、の、手



係り大繁曉たり長逐ハ御躬の大事なり早
 く小官人を呼返せし言付て奴僕を逐遣主
 人ハ奈何と立荷者バ無慙やな傳五右工門
 ハ仰向ハ例れ右の腕斬放されて已息断果
 形勢多バ鹿藏ハ音声を放つて悲しむ
 ハ限りもなし傳五右工門の渾家茶戸と云も
 走り出て死骸ヲ携り噴浅塚の此為体やな敵
 ハ那奴何方の的や何意趣有て恁奇たし
 ふ欺計打ハ為けるぞや噫最惜や情なや
 て前後ハ把縫哭悲めバ鹿藏斬位目を押域
 ひ令室怨敵ハ大繁曉侍ふ是者給へ云る
 ら橘の死骸を根き來り御覽侍へせの相敵ハ
 藩臣橘左近之助ハ侍今一個ハ逃去たれ共
 目ハ懸んと慰む時ハ次男民助ハ奴僕諸共
 引傳して且親人ハ奈何と云つ立荷て是を
 見るより是ハ口惜や浅塚やとて声打放ちて



悲しけれバ鹿藏ハ橘の死骸を指し僕逸
 つて投殺したれ共者給へ怨敵ハ橘ハ
 する今一個の怨敵ハ橘ハ大館七郎右工
 門ハ先月十六日御殿中にて宗奴大官人
 と誠合仕買たる処を意恨とて橘ハ梁奴
 の高第へ打談合て竊ひ來りて比奥の
 欺計打として己が非人害物左近之
 助の躬に把てハ大官人をバ怨む條ハ僕
 子誠合の相敵なれば怨なぞ別ハ鹿藏規小
 然らバ今甲夜怨敵の犯人ハ全ク大館と思
 ハれ候奈何思召やと問けれバ民助涙を
 て打点頭汝の推量の中ちるべし急ぎ大館乃
 弟を窺ひ尙怪しき容子も有バ疾く歸りて告
 知せもや序ハ親旅浮田六兵衛濱九郎右工門
 松本与十郎谷口吾兵衛の衆人へも此騒動を
 告知せし疾く疾く促しけれバ鹿藏畏
 りて逃出しける母子主従男子の的ハ死骸の

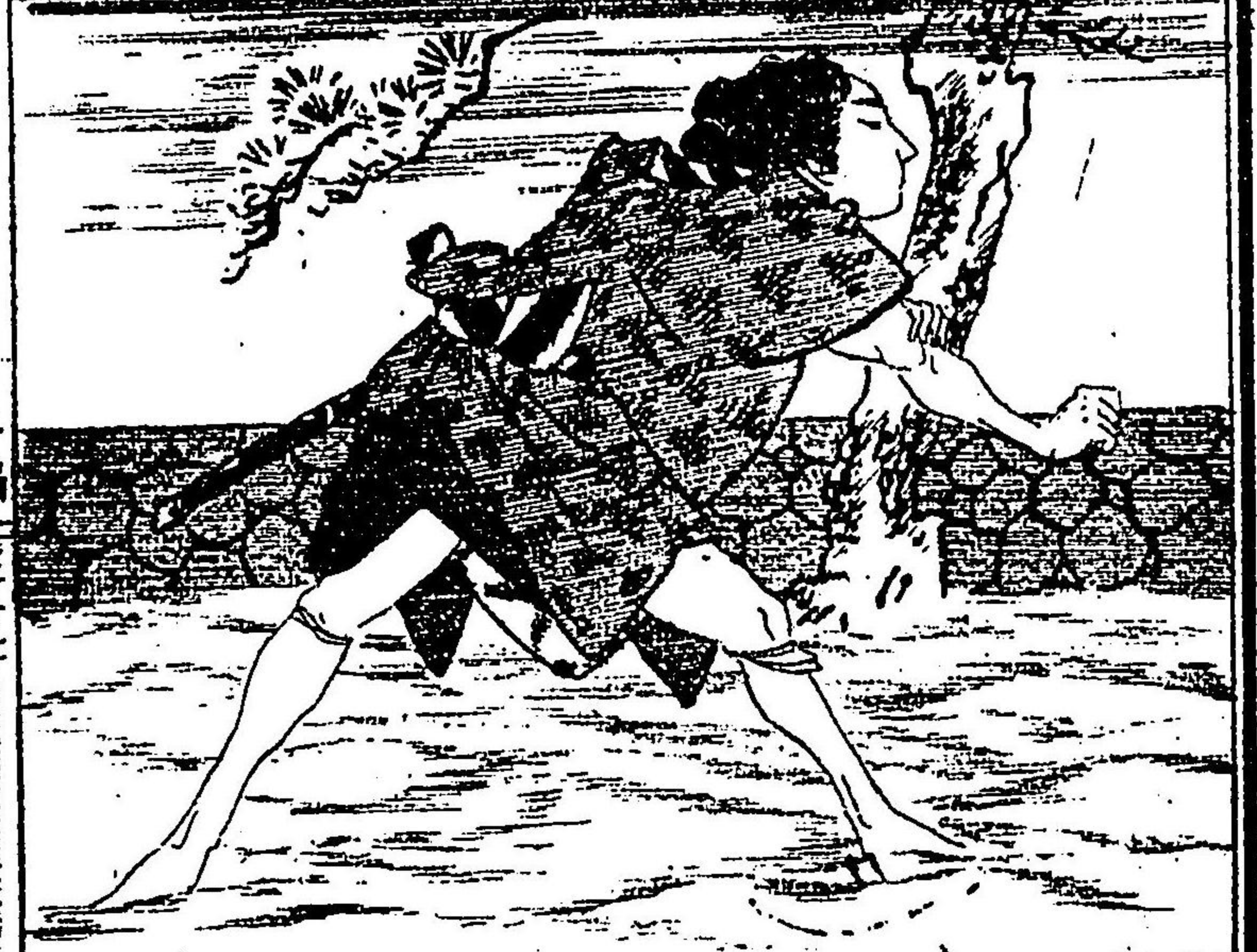


傳五
 右工門
 最期の
 図

前後は侍集ひて哭悲む外便なるり。民助
 了得ハ武家を生レバ恩愛の嘆き自ら禁めて
 父の死骸を室間へ捲入血汐の穢れを浄めな
 どして鹿藏の倍糸を等し。今夜も終り明放
 れけり。恣て奴僕鹿藏立帰りに曰く大館の弟
 起きて程の容子を窺ひ侍ふ。何日の程に
 準備なしけん外面門戸を開放つ。家宅に
 入氣も有ぞして早速電せし様着へ侍ふ
 推量違ハ主人の恣敵ハ渠も極まり侍ふ
 思へ。御親族の旁へも是ホの轉末を告参ら
 せたり。追刺御入來侍ふべしと大息吐て注進
 しけれバ民助ハ齒を喰ふ。りて大館の非道
 思むべし。とて不覺に荒出さんと仕たりけれ
 母茶戸是を押禁めて云様や。物も狂ふら
 民助ハ敵と知たる大館七郎右工門。歴々近き
 在べき様を殊も同落中の相敵あれバ且
 御主君へ奉細然謝し御檢便も乞受ぎ。てハ



那事も俺俣る。成と根根る場処。ハ非
 る得浮田の内室なれば上への遠慮を言喻
 ぞ。民助矣。御最もと心を鎮め追々親族入
 來仕けれバ。躬て商談の上。此起きを老職長
 へ。討へ出まき。裁人も大きき駭きて。直様主君
 へ。言上あして御檢便として。浮田の門人森本
 三之丞。入來なすける。民助母子奉細申上る。三
 之丞も師弟の別れ。小怠憚の落涙。數行は。速
 且。榻を余場。於。投殺したる。鹿藏の働。忠義
 一般の手柄。賞美し。別。大守。の命。と。速
 て。大館。行方。詮議の。処。ハ。此。方。より。得。与。吟。味。を
 べし。傳。五。右。工。門。數。年。の。勤。功。横。死。の。果。甚。た。不
 便。に。追。日。余。敵。を。把。て。得。ま。せ。べし。葬。宣。は。計。心
 べき。昔。仁。愛。厚。き。御。意。下。り。けれ。バ。民。助。母。子。親
 族。ま。で。も。主。恩。辱。を。し。と。拜。謝。さ。し。ける。御。檢。便
 引。把。て。後。形。の。如。く。余。夜。に。葬。送。營。み。けれ。バ。中
 陰。も。實。夢。の。如。く。嘆。き。の。中。に。鳥。を。累。ね。たり。傳



五右衛門行年六十歳法名涼急院浮田満武居士と謚され名而已卒増進遺したる二十尊急れハ後の妻子へ泪の種を添る成べし徳て翌年ハ元永八年辛巳の睦月を向ふ浮田の家ハ月忌の佛事法延開きて一族を招き民助席に給仕して申けるハ大守御威勢を以今日まで諸方御詮駁下さると雖も徳政大館の行方今も知然バ上民匹夫の的なりせば公の御力を蒙りもて敵を打給ハるを等べきなれ共小子亦くも両刀を跨ぎ殿の恩禄を頂戴して刃道師範の家を生れし射の徳て過べき心ハ侍らば父母の楚少ハ俱も天を戴り候へ一族の旁憐愍有て此願文を就て御連判を備へ願ひ侍ふなりと思ひ入て乞聞へけれバ浮田六兵衛を始め一座の親族食民助の孝心を感じて一議小遣ハキ兼諾して介登



浮田が
主従
傳五右衛門の
死を悲む図

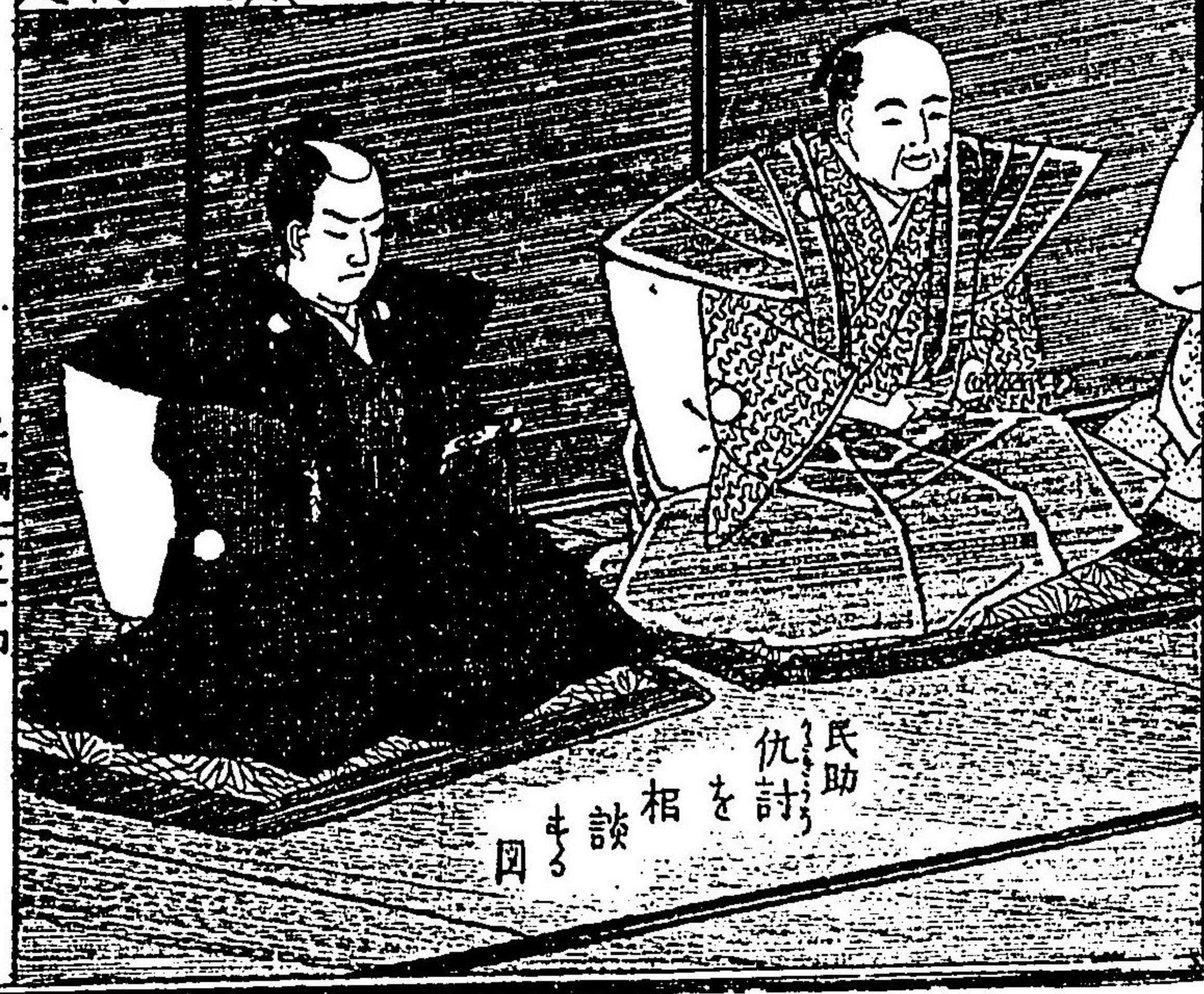
日連書を認め民助歎ひて之を懐中し老職長盛藏人は屬て御前披露を願ひたりける若殿満元之を聴し召民助を召れて曰小様ハ傳五右工門不慮の横死にて公方の愁傷察し入ん最も仇討願ひの赴き若輩ハ神妙の志一如何も聴届け得さきべし首尾能討謀せて帰参せバ元の如く奉仕致せよと誰う有民助へ物把せよと御近習へ御指揮下れハ豫て申度されたりけん一振の太刀を小四方も兼て民助の前も特来りぬ若殿民助へ命せける様ハ夫ハ世般予が賤別へ大館が首を斬料とせん仇討免許の御書を添て首途を祝して賜ハりけれバ民助ハ尤つと計り有難涙は咽び入て長盛は屬て言上をやる様ハ君恩辱あり恐れ奉り侍心徳愚臣の孝道立させ給ハる君の御仁情を頭も戴きやこら尋ね討てや侍小べき追附まくり帰りて御厚恩報し奉る鳥を折



り侍と依然として拜射をける令民助へ
下し賜ふ刀ハ志津三郎兼氏の鍛ひ二尺八
寸の名刀にけり民助限りなく頂戴きて藏人
へも懇情を謝して大守へも御殿を申述願て
退出をたりける恁て母を始め諸親類へも
御前の首尾を告聞へつ愁ひの中の歡ひ催
ゆし母のそを六兵衛は憑き尚余の人へも
助けも乞ふ大家領諾して安堵をべしと後の
共引請けるよ子召仕ひの男女の的も夫
々黄白を逆とて殿出しぬ是や要合離散の不
定の世界愛別離苦の悲交れハ主従泪も袂
を潤しける中少も彼鹿蔵ハ曾て受て民助へ
願ひて申けるハ拙者ハ大官人御存生よ再生
の洪恩父母も勝りて托庇の仁情躬も溢れ
侍ふ御主人は価値せざりて狂乱の業病
何日治るべきや固より帰る家も侍ハギ殊
更余大恩有御主人を暗々人手は密ハれて余



処よ昔過を謂ハる拙者が躬も彼大官ハ
親小等しき思主の怨敵を民助様へ打任し侍
ハ大官人へ分解なく侍ふに万乞敵討御供
の儀を鹿蔵計りハ堀へさせ給へと思ひ入て
ぞ望みけれハ民助ハ之を制りて云様汝の誠
實満足は顧へ共俺若輩のよゆへは助劔の爲
家標を行伴しと云る則ハ先考への孝養も
もなすも師範の家の瑕瑾も成べし汝三年
四年の忠勤竭せバ俺們父子へ恩義ハ報へり
然も有むやと説聞ゆれハ鹿蔵つや會得
なまび一條りハ御理りて侍へども擲も大
官人の命せざるしも俺も兩個の孩兒有汝
勉めて世話を呉れと不屑なる鹿蔵もそ
家標と因めバこそ託せ給ふ御志しの誤
さハ膽も銘じて今も忘れ侍ハギ爲十郎様
過給へども大官人より諾むる尊公様行向
定めぬ旅路の御先途看逐る役ハ此下郎は是



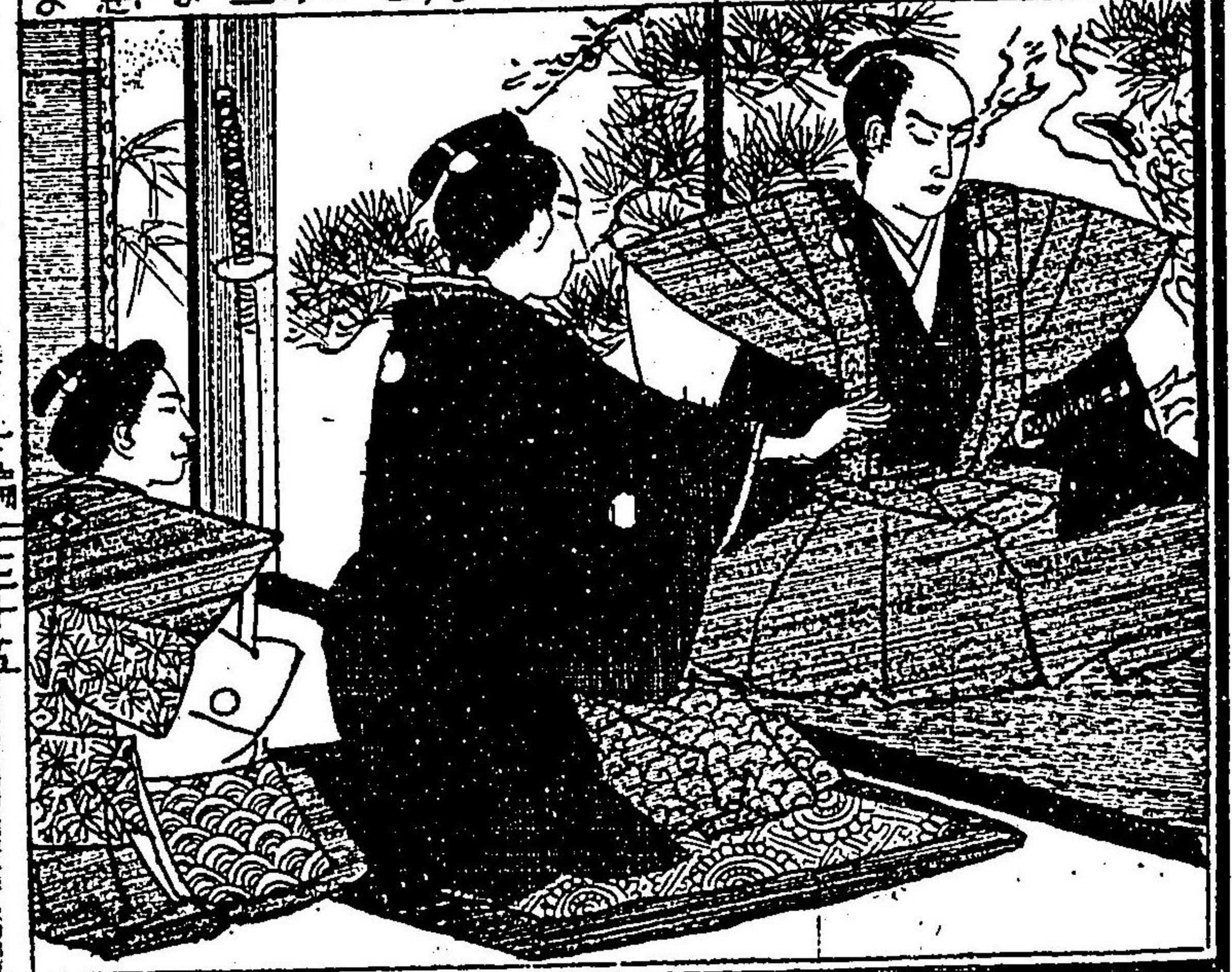
民助 仇討 相談 目

大官人の遺命同前侍ても御供許されやと
押傳しつ望みけれバ民助ハ困りたる額を
撫て如何程方望またりとも何國と知ぬ怨
敵の行方子供を卒ち却て悪し殺ハぬ願ひ
諦めあけしと云放されて奴僕鹿藏那思ひけ
人腰刀抜拿兩肌脱て肚に刺立んと民助周
章て押禁め是ハ那事ぞ物や狂小俺云処を
悉むる故や道理を得与分別せバ服立まべ
ま苦あさるを些声暴らり小言喻せバ鹿
藏完示打笑ひて御師範の家柄を以人の謗を
厭ひ給ふ旨僕能心よ分別仕り候拙者皆今死
る覚悟ハ恩義小報ふる是殉死ハ狂乱と成て
巷小惑ひ困縁有てや世家の家臣と今日まで
存命仕る処ハ皆是大官人の御恩よて侍ふ本
性ハ僕一人と成し御病を顧れバ父母
同胞も逮たぬ御慈愛殉死して黄白も赴き尚
御奉公仕り度侍へ更々御怨申切服まあ



民助藏人は
依て父の
仇討を
満元公へ
願出る図

御手放されよと撥除るを民助尚も禁むる
処へ母の深戸紙門を押開や鹿藏速まるよ
勿れ敵討同道の存心ハ妾が許して得さすべ
しと云つ立出て座に押直り鹿藏小對ひて
涙を流し先刺より民助との議論幸那首小て
残も聴ぬ恩を受けて小恩を忘る人多く恩を請
て小恩を報ハんと云真の人ハ是汝のトハ
故小良人一旦の慈情を感じ本國住処へも立
帰らば俺家の奴僕と成てより今日まで無二
の忠勤竭し尚敵討の供をも望む小心標の堅
固あるも實者拳義者忠節然こそ草葉の
蔭より故良人も飲ひ給ハんと想像る也
李頼母しき汝の義心那ぞ彼も終らせざらん
や長の道中俺子の世話も汝に任さん供も立
べし民助鹿藏を俱し侍へ親と主との仇討ま
ハ天の眞慮も思ふべく思ふ忠孝全く本意
を得なん然有ハ國に残る母の妾も鹿藏傍ま



在バ安心して老の寝食快くもべし万事汝を
 憑むぞりして後云さして亦哭入バ鹿藏容
 を繕ひて大まき歎ひ歎討御供聞届け下され
 拙者の存心賜へさせ給はる令室の御慈情志
 るべくは速バもあが若官人の御先途道
 中御介抱の一條は於ハ鹿藏分骨碎身して勉
 むべド大官人の御仁情を以拙者難治の狂病
 をまじ肴病下さる莫大の洪恩御存生ま
 報し奉らば怨むべし大館が為恩主討る
 無念口惜まハ管膳を断る思ひ侍へ若官
 人ま供し奉る儀も万歩の一の恩報し而已官
 ぎ御安心して等せ給へ馳て吉左右告奉る
 大夫なる余返答も母桑戸も愈歎ひ終る民
 助も兼引せり自是族准備も懸りける
 時節老職張盛藏人より便節を以民助を招き
 ける民助把敢も長盛弟へ赴き如何なる御用
 と伺ひけれバ藏人密申されけるハ世般仇



民助
鹿藏

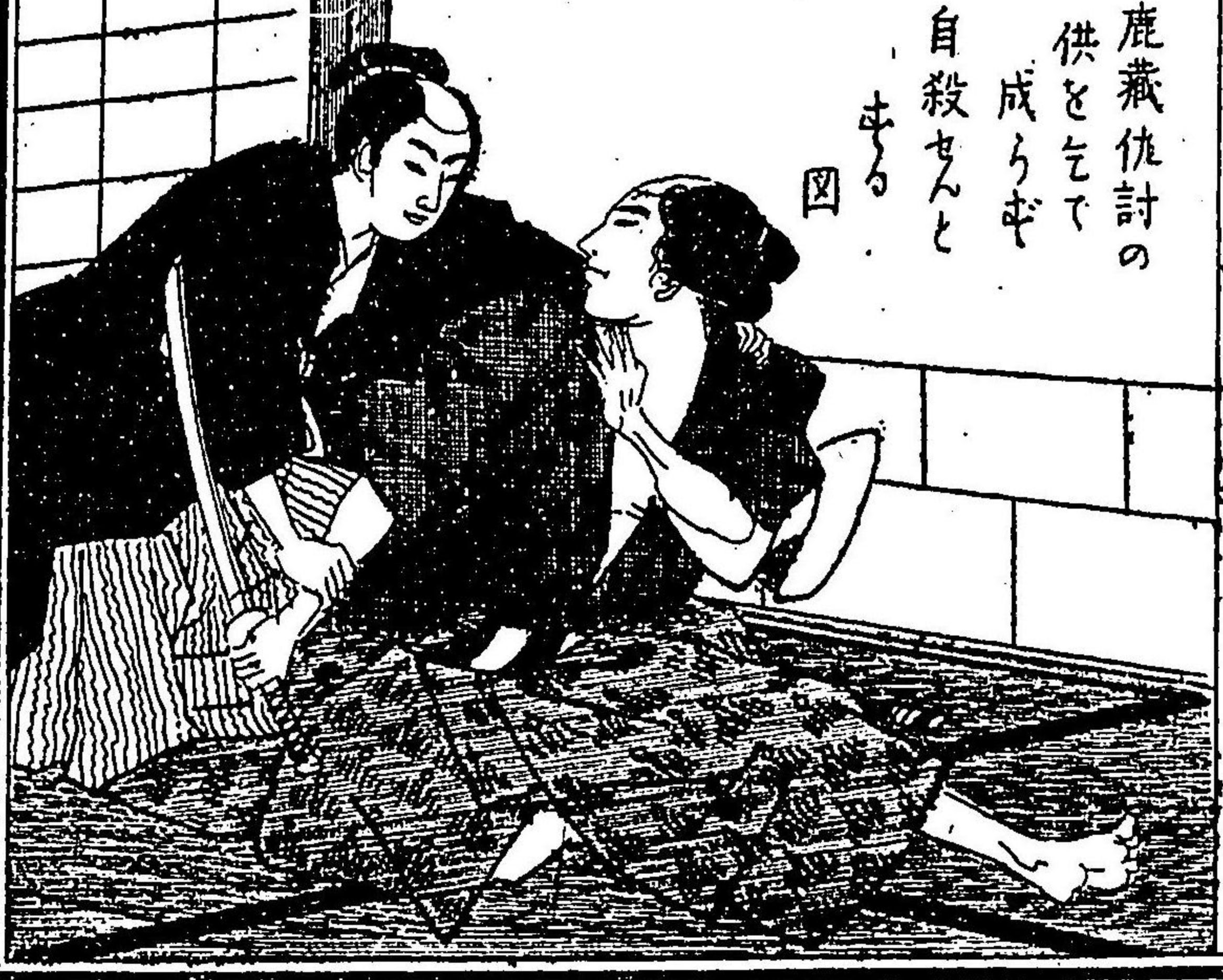
暇を
つら
まる
四

討御免許の一條然こそ足下満足たるべし併
 敵大館ハ水傳流の達人最も容易なるゆ癖者
 へ足下討損ハ為まじき共共其實ハ是を
 危踏処へ外ハ助釘の的も有まや足下單身
 て出るなりやと問れてたつと平伏し段々御
 執事の御仁愛も領り御前首尾よく御職家
 愈近日出立して侍ハ拙者若輩の不丹練少へ
 小慈母親族も危踏侍へども聊亡父教導の
 儀も侍へバ得こそ討損まじく存じ侍去
 るが左右ハ運次第まで口立派にも申難
 り茲ハ亡父存生の節より小子家小奉公仕り
 侍ハ鹿藏と申す奴僕の的段々と供の儀願ひ
 候ハ頗る忠義実意深き男にて母も是を勸
 め侍ふに就同道許して召伴侶侍ハ此的召抱
 へたる傳未を申すハ筒様ハの儀も侍ふと
 下來由具ハ話説しけれバ藏人甚だ感心を催
 ふ一実や情ハ人の為をば傳五右工川殿

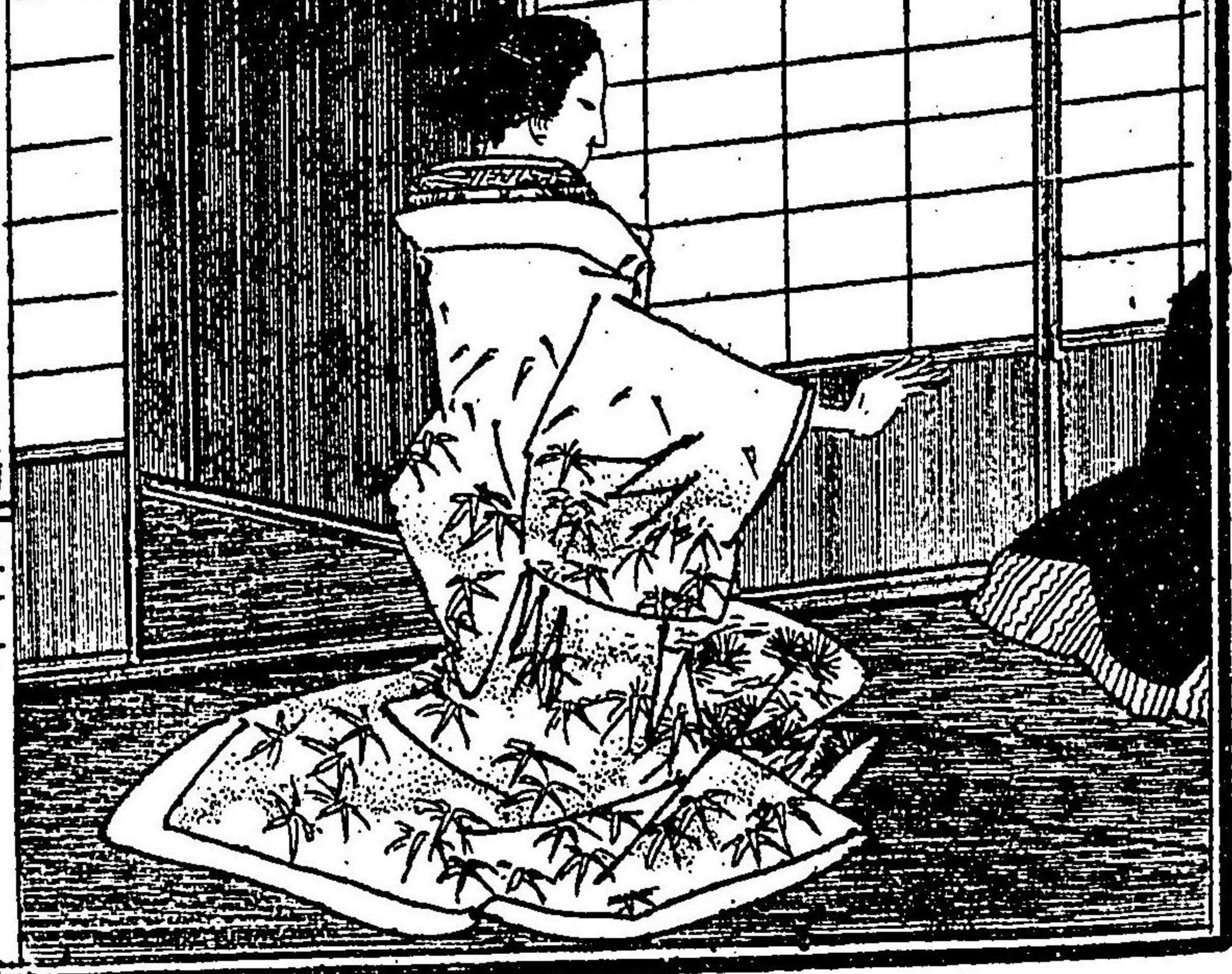


の仁徳陽正小茲子頭ハれたる哉小忠僕
 供なま則ハ必勝の片腕と思ハる一某些少
 なぐ賤別せん然ども未だ整へざれば啓行
 前日進もべけれ何日刺立るやと問れし
 く民助答へて明後日侍小藏人點頭て如
 様日柄も然らば明日鹿藏諸共必此方
 へ入來せられ相等同居と申されければ民助
 厚恩禮述ていそいで走歸り
 慈母鹿藏へも此由語りて翌日亦鹿藏を供
 卒長盛の弟へ到りければ藏人兩個を開室小
 招入借藏人の申さる様ハ主役の者義孝
 忠節の程藏人之を感ざるの余り些少なれど
 も首途の賤別是収められよと柁を乘たる黄
 金十金を民助の前へ押直して再申さる
 様光陰がまぬ旅路の中ハ別て雜費の多き
 物へハ小念心構へハ有べければ共是藏人が路
 費の助銀敵を討む寸志こゝて眞情込たる

鹿藏仇討の
 供を乞て
 成らむ
 自殺せんと
 する



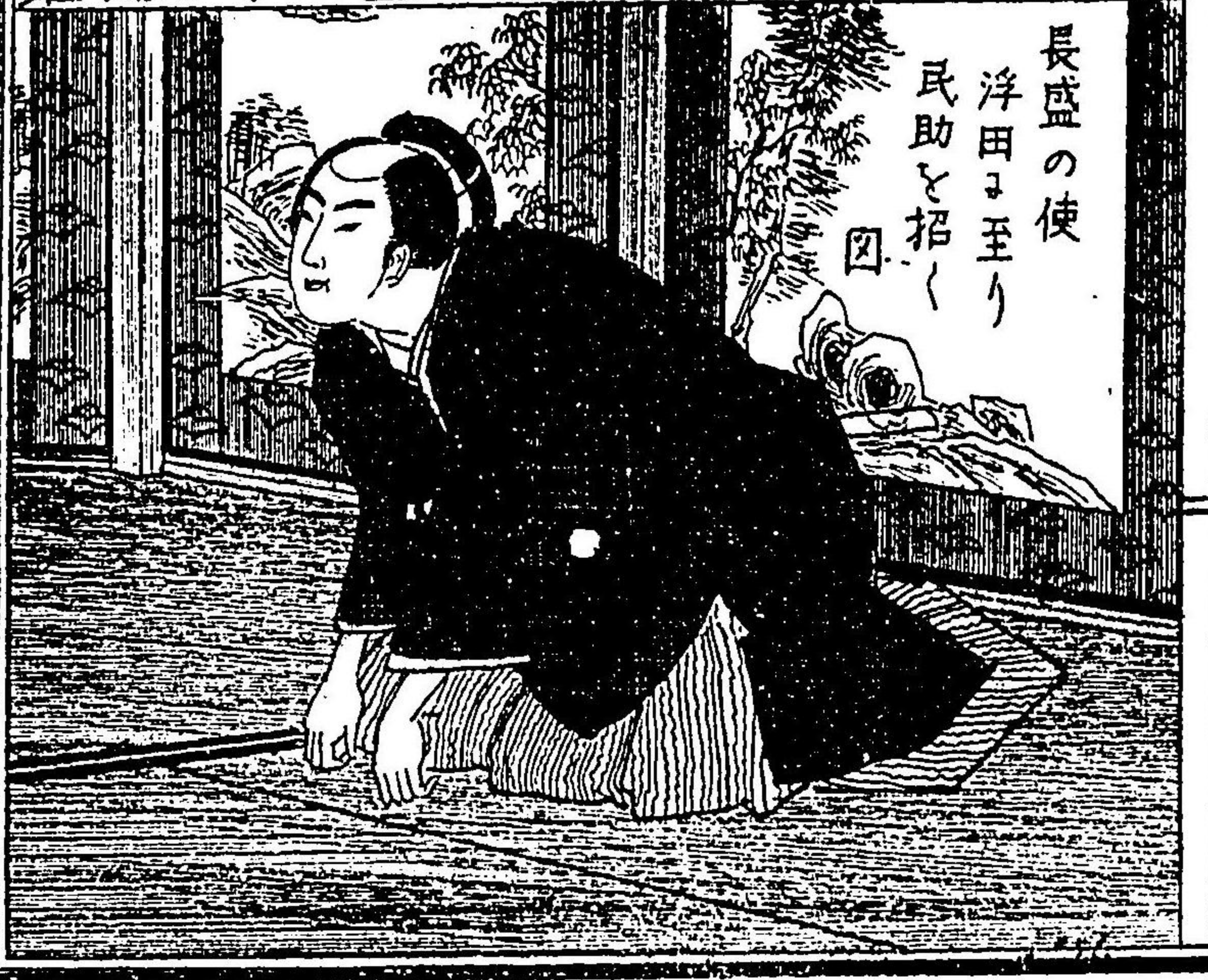
余賤別ハ千里を馳せき逸物へけり民助主役
 感謝小堪も噫と計り薦席小平伏娛し目小
 咽び入ら民助漸く類を上つ是ハ勿体な
 き至宝御惠投何共忍入て申様な辞退ハ
 却て失敬侍へハ有難く頂戴仕り侍ふと三
 度頂戴まで鹿藏も俱小御禮速つりけり藏人
 歡びて再云様足下明日啓行は就て某別寸
 志の賤別あるへ自是主僕到る処ハ且京攝を
 志しつふん然らば舎兄爲十郎殿のト居を尋
 ねて巡り會候を敵を討る則ハ親父傳五右
 工門天魂も嘸々満足や思われなん此議
 を心得給へくして思ひも寄ぬ小詞小民助
 ハ大まよ不審て是ハ存じ懸るま命せ侍へ
 兄まで侍ふ爲十郎ハ昨年二月の頃御宝藏な
 る夜盗一件の越度就て已に切服を命せ付
 られ則ち御弟の裡に於執事御手づら小
 介借蒙り切服して相景たる後死骸ハ親共へ



下賜の賜なり香華院へ非り侍ふ物を今亦介
 兄の卜居を尋ねて俣父の仇を討つと曰ふ
 執事の命せ小子は於ハつや〜心覚悟仕
 らば奈何ある御趣意侍ふまよと眉をひそ
 めて尋ねければ藏人微笑して打点頭義之信
 傳五右工門殿俺一言を守り詰て骨肉親子
 の中も秘されたる堅固の忠臣死したる哉足
 下之を曉しと思へば儲こそ賤別と云たる
 之尤賢儼令之を聴とも他家の人へハ風説無
 用之然ハ実事を話せばとて咳共ハ民助鹿
 藏を近く進まれと召れたりけり

此時藏人更めて申さる様夫國家の宝ハ尊し
 と雖も庫倉は収めバ介名而已之智臣良臣を
 畜ふハ國家益して君を佐け能泰平を具
 ふに到れば人より外は至宝ハな〜然りと雖

八回 浮田主役御職を蒙りて敵討出立

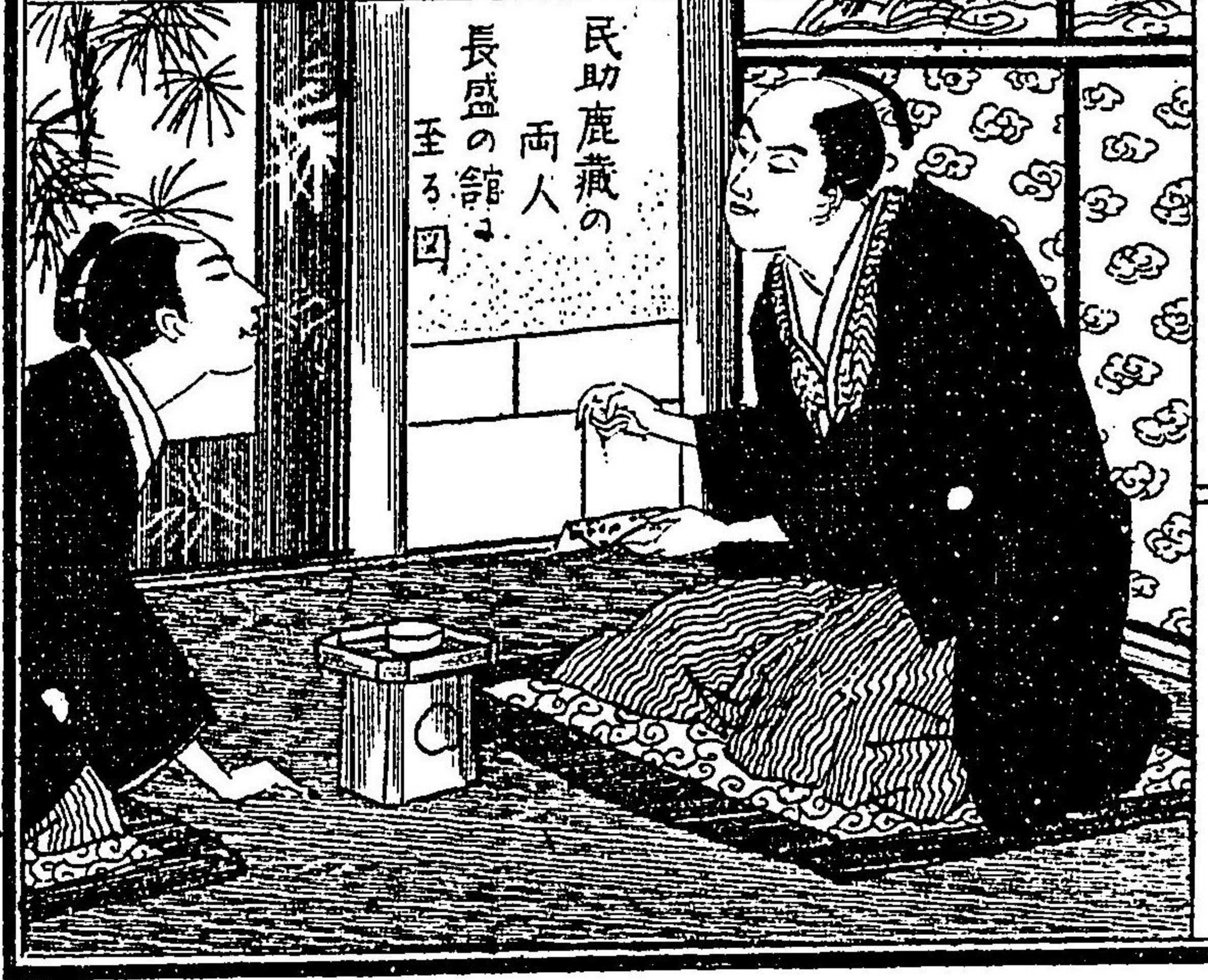


長盛の使
 浮田に至り
 民助を招く

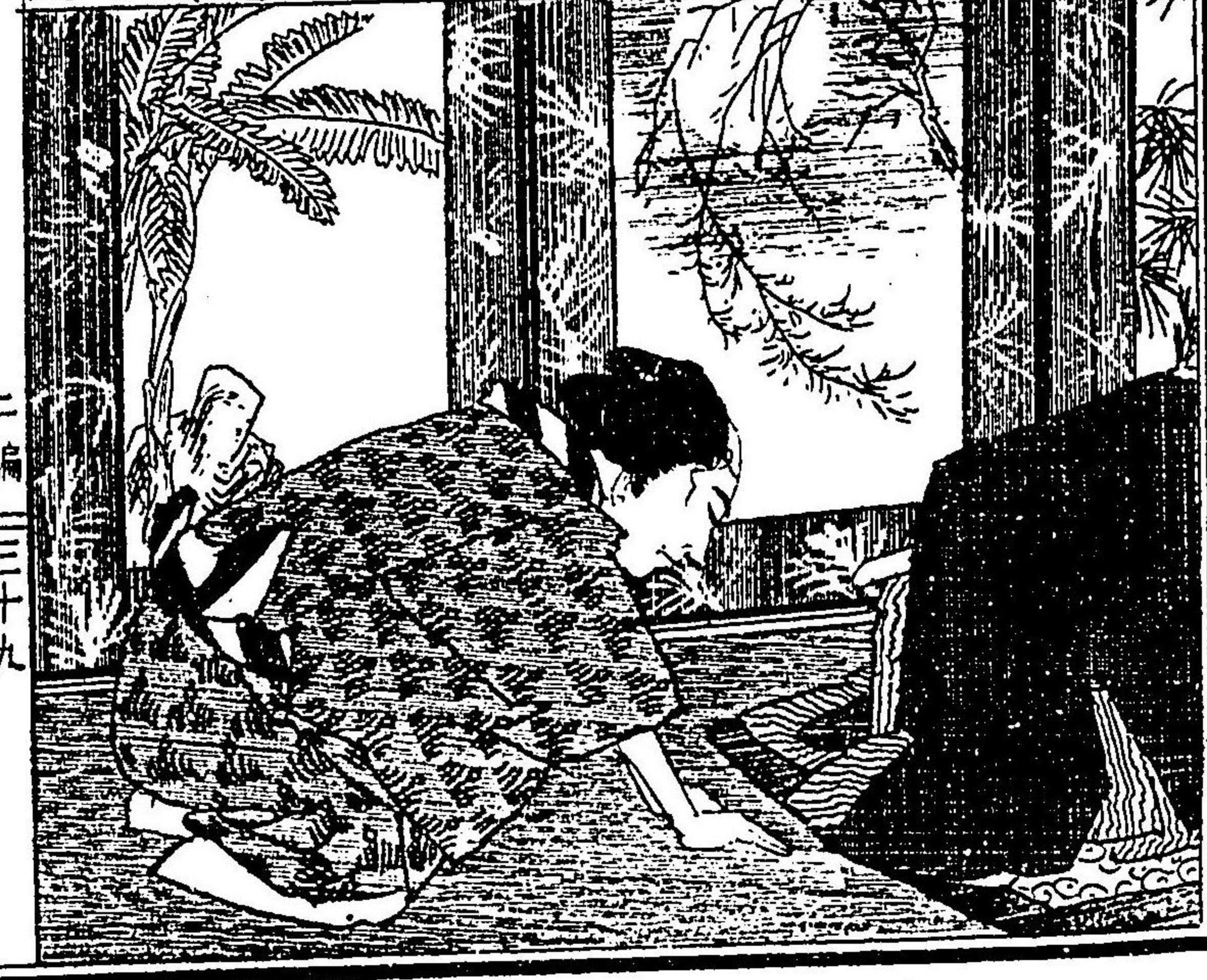
も世家の重宝朝日丸の名劔ハ天子恩賜の廉
 を以殊更忝なき宝劔なれば一藩中の他言を
 停めて未だ世上へ紛失知せざ藏人密々詮察
 なす處なれ就之為十郎殿身上至君の御怒り
 甚〜再三四助命を乞ふも御鎰領りの役
 目あれハ主君の立服も御最もハ終小切服
 と定まりたり〜其借思ひ巡り様ハ藩中の
 詮議ハ俺們的役外を且探り索むるハ服
 心の家臣小有てハ是ホの鑿目ハ命難〜君
 の怒ハ強〜雖も奈何もして御前表を繕
 ひ爲十郎をバ助け躲さバ此人躬の職分の越
 度なれば水火の中を潜るまでも尋ね索むハ
 必定まべし尙も把返して帰るぞな〜バ夫を
 御使言の楯となして以前の如く奉仕せしめ
 人と思ひ着たる時も倅僥足下の家なる若黨
 作助測平使ふ來りけるを想れば是介面親年
 齡の似たりや似たり苜蒲杜若恰ら分身一對



の如く是究竟の身仗りへと主用は来りしを
外き以密事を演て命を望め示云断るを洩
てハ大事と無理と作助の首打落し主君を謀
るハ恐れ有とも詮する処ハ忠義の一固為十
郎の首級と虚計難なく御前を繕ひければ
亡骸ハ衣服を着替足下の宅へと送らせ
るハ為十郎殿ハ前日の夜に竊に容を省
せ落し逃せり京橋より尚バ鎌倉の方へ
地は侍て詮議やせん此事傳五右門殿へハ
告し共洩るを恐れ他言を停めて夫謂親
子の間までも云で過されたる物と思へり則
ち秘計の是賤別なれば主僕行向の心便り
今俺始めて口外ある秘をべしと云て
告らるハ小民助躬を友まで駭きて且歎び
座を飛蹴巡り誠と思ひ設けぬ舎兄の存
命執事の御慈悲以助け給はるを察て過ぬる
俺愚まよ此御賤別の御一言ハ拙者が為る



六箱三略英氣万倍の賜物も侍ふと三拜九拜
して恩を謝し涙を尚立添るける鹿藏も
同く歎ひて兄若官人京橋に在るハ怨敵を尋
ぬる尚便宜あり是にて願ひ合し侍ハ彼若
黨作助の正侍へせ御弟へ参りて後
宅もなき出奔の容子ハ僕までも不審に存
ト侍ハ原來為十郎様の御身代りな死して忠
美を顕ハ侍ふもの漢の紀信の例を把し突
天晴の死後の手柄是と云も御執事の仁智妙
計為十郎様の幸甚侍ふと深く感伏して
申ければ藏人鹿藏も申さる様ハ否々介方の
心操も競べバ作助ハ同時の論ハ非義は進
みて介主を思ひ抽て介供を望む心庭中々武
家の龜鑑と謂べし誰も恚こそ有度物と感
美の詞添られければ鹿藏ハ眞加至極と謝し
たりける終に至僕ハ殿を迷て賤別の黄金を
拜納なき藏人亦別一封の書牘を民助に送



与て云る様横州東成郡王造の卿は木屋の
卯兵衛と云泊舎あり是ハ先年より御館へ
出入をせざる男なれば俺足下門へ添書を惠
まん上方滞留の事も有ハ此卯兵衛方にて宿
せざるべしと残る方なく情有りハ民助此
書積を頂戴し賜ぬ御余波ハ許し給へ恥て御
見参仕るべしとて主従私宅へ勇帰るぬ
て是ホの下の処き母祭戸へ蜜を語りて今日
ハ諸親族を打招き留別の蓋王を把交し行も
留るも躬の無事祝ふ酒煮ふ介夜を更たり
ける翌れハ応永八年正月廿八日主僕旅准備
十分より民助ハ主君の拜刀を帯し鹿蔵の
肌も路費着させ浮田六兵衛濱九郎右工門
松本与十郎谷口五兵衛們會夫々の賤別なし
？ 荷集ひて首途を省送る母祭戸ハ玄關へ
出て民助鹿蔵云ける様敵大館を討謀せる
追ハ殊更躬を大切小守るべし那も堪忍の



二字を旨とし決して喧嘩口論をべからず亦
寒暑の障を能防き病と看たりハ良劑を喫て
必も強て押し莫れ且酒色の過失索めあせり
と老の縹言も子を顧み慈悲の詞も別離の泪
民助謹みて答けるハ慈母上方乞堅固は御在
て怨敵の首を御覽下さるべし恥て某出度御
見参まへしと勢合せて申けれハ鹿蔵も答へ
て申ま様令室様御機嫌能御在給へ若官人様
の御躬の上ハ下郎奴急と守護仕るハ卒々御
出と促しけれハ民助一緘へ暇乞して門外へ
立出るとなま此時慈母祭戸と立て民助
等と云より疾く數十本の小柄刀を飛して民
助目懸て撃てくれハ民助心得たりと首笠
よて疾くも受留是ハ慈母上ハ那も仕給
ふと云ハ祭戸完示と打笑腹中ハ何國も敵の
中へ送御の教へハ有と云とも不意を防ぐの
心得有やと思ひが故の妾が誠まなり是介旅



仇討の
出立
離盃の

路の要慎なれば、管ギ油断ハ致もべり、慈母も利き首途の教訓民助もつと感伏なして慈母上安心給はるべし、滅尋ハ油断ハ仕つて疾御去バ目札なして鹿藏後方ヲ属隨ひて勇氣凛々として出立なしてける神な、ぬ躬の是や此母子一世の別れの端と俵者遣キ後の嘆き永き悔ミの出立と成ける、悉て浮田民助主従ハ長盛藏人の指揮もあれ、且京棋立立踰て為十郎の景元も尋ね怨敵を探る便宜もせんとして祥瑞の御城府打放れ、撫養の津へ脚を進め淡州福良へ渡海をし、て仙光寺山の杜下ニ出志、繁の浦辺を北へ歩行て、富屋の湊ハ船を索め、根津須摩浦ニ着、し名も負ふ福原内裏の舊跡をも見物し、て兵庫の津ヨぞ臨ミける思惟有躬ハ春の旅路も杖を寄れど心留らま蹀り、て芦曳の難波、写小ぞつきたりけり、緒引付の書積もあ

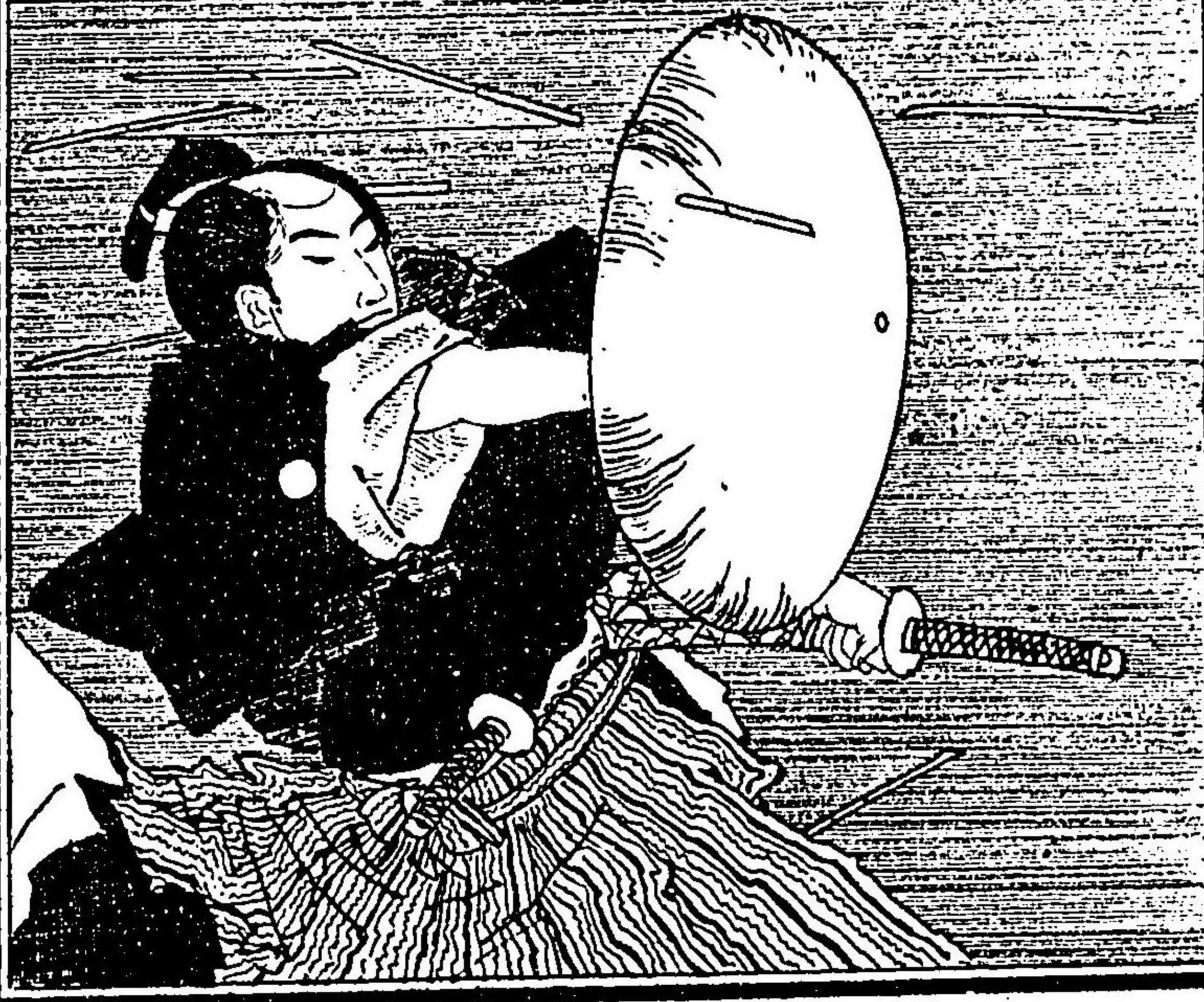


れバ姑くせ地を詮登せんと彼王造の卿も来りて木屋の卯兵衛を尋ね、的り長盛の添書を、出しければ卯兵衛ハ一議なく迎へ入て奥まりたる客室小請し物見の會釋して、町噂も心、皆兩個暫時滞留の旨も茲も止宿を累ねたり、し日毎諸方を見物と号けて兄為十郎の景元ハ勿論、敵大館や能回なさんと此処の卿、彼処の村或ハ八人集ひ寄社地、枕刺の賑ハ、き地処と着てハ主僕打列、探し廻り過とも、なほ木屋の許まで五月余り滞在させ、を介手係りハ得ざりまけり、却説大館七郎右工門義廉ハ十二月朝日の夜、浮田の弟へ橘諸共、竊ひ入て介躬傳五右工門を殺害あせしが、左近之助ハ鹿藏の爲、小忽ち投殺されし、容子を、者る、渠奴ヲ捕へられ、民助を介終棄置て辛く、逃出後暗まぜ、思ふ左近之助をバ、已小那首小失心ハ、俺躬



母架戸
民助が
手練を
試みる
図

の処為ハ頭ハるべし此上ハ管逐電ダて後
 代安きを計るゝ如き也ガ弟へ竊ま走歸り
 時黄白抜へ寄て肌ま着て再び蒐出讀洲
 度津を志して今夜ハ八里計り走りける同
 國脇町と云地処ハて今夜ハ未明たりけ
 る極寒雪中ま走る物々心体此時大まき
 りて今ハ一歩も進難し或農家ハ入て焚火
 を乞料を出して食物索め茲ハ一昼夜躬を懸
 めける翌日此地処を立出て重清と云地処
 どりて讀岐國佛生山ま立喻漸々ハて度
 津ま着し大館此時思惟ける様ハ俺火急ハ
 して分別能ハキ海方の詮駭恐るゝ故ま故意
 陸地を逃退きて此讀岐路へ來りし共中國
 西國ま渡る則ハ却て知音の的ハあふま且偷
 米把たる朝日丸を以備しハ宝躬の差合せ
 他手ま奮拂ふてなせんハ東國の方こそ
 安全あふ人如し自是便船索めて且京横ハ罷



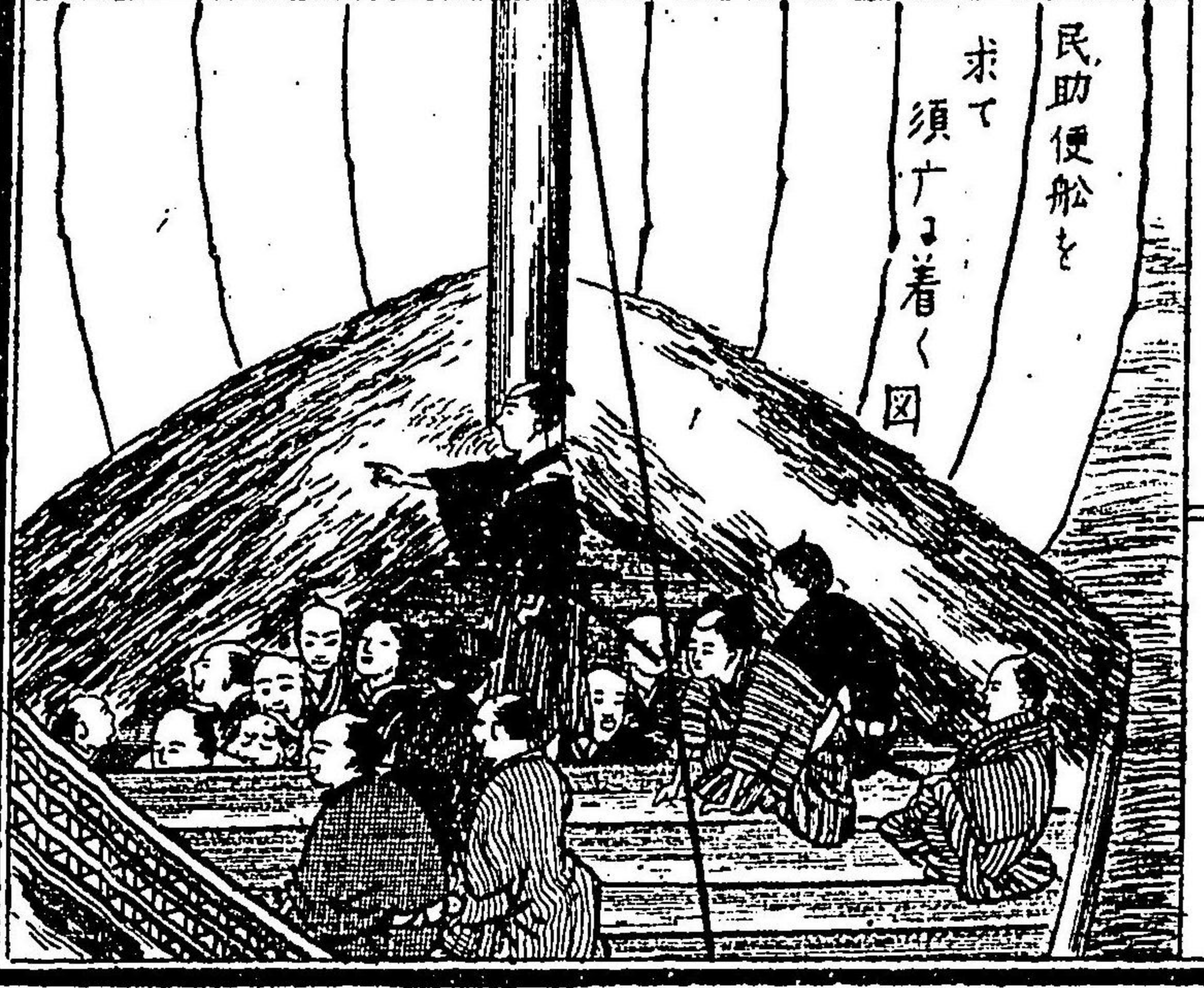
り登り吾妻の方を志まべしと自問自答して
 便船を探し同月六日乗船して難波浮き
 して出帆し海上二日小津浦ま着ぬ大館
 船賃を拂ひ勞を謝して此船長の導を以名兵
 の浦に泊りて天八分の量町の事ハ此時代の
 播摩屋可六と云る旅舎へ大館を引合しけれ
 ハ此家ま止宿して居ける処追々嚴寒烈
 月迫し左右なす裡年も晩て旅行の思ひ少選
 止まり茲まで終小越年なぬ然ハ急がぬ旅
 路ま春を向ひ元三の式日ハ何國の浦も人の
 心ハ太寛儘まで此処彼処ま酒酌ハし己が
 様々小笑ひまよめ大館も余寒を厭ひて
 東向行の念未だ催ふま毎日播摩屋の奥室
 ま在て旅苦を忘れの酒熱を設け宿の炊爨小
 酌を拿せつ浮世雑談ま笑を傾け日毎遊び興
 して居たりけり一日亭主可六出來りて大館
 ま對ひて申す様ハ御客人様ハ私宅まで測ら



民助
 手練を
 頭を

り更りて可六云ける様ハ是ハ一般耳寄の
 話ニ其公遊佐殿の藩臣の中ニ此方血縁の武
 士あり先達て東國よりして文通を以知るる
 詞ハ世時拙者ハ鎌倉ニ居る仔細有て京棋
 罷り登り畠山基國殿の老臣遊佐石見介の
 家臣と成て尚亦近々鎌倉へ下る處ニ此方へ
 告達せし故ニ俺一向小東行を欲々然る今
 其許の話を聞バ遊佐石見介殿留主居有
 俺血縁の的を思ひ出せり倘其許の知藩臣の
 中ニ姓名ハ在河三左工門と云年齢三十七八
 才の武士を知已てハ有ざるやと問バ可六
 打点頭つゝ奈何も在河氏能存侍ハ一兩
 年後より御用條にて鎌倉表へ下られたる由
 昨年五月ニ帰國致され自夫僕も御馴染と成
 て東行御風説兼ハ侍ハ只今則ち主人ニ属
 て須川崎御下館ニ在しぬ時節ハ任吉へ御
 参詣は僕の宅外面前御通行御立寄も候こと

り御越年なく給ハるも數日依然御座へ
 し豫て東行の由兼ハ侍ハ吾事ハ何方を
 きて下り給ふや併せ春余寒甚だしく今姑く
 御滞留有間欲し今月季も速び侍らば道中
 の程も些ハ暖く勞くも侍ふまじと云ハ大
 館打微笑つゝ然ニ俺余寒の強きが故ニ恁思
 ハずも長滞留せり実ニ徒然みて仕様もなく
 毎日座して酒肴を友とし喫暮して亦倦た
 りけり俺ハ鎌倉表へ下らんと思ふニ就夫尋
 ね間一固あり世処天満の杜東の方なる畠
 山基國殿の下館ニハ世時留主居ハ誰人あり
 や其許聞有ハ告給へと問バ亭主可六膝を
 進めて川崎の御下館ハ昨年春より御留主
 居代り暫今ハ遊佐石見介様侍ハ大館些し
 駭きたる面色にて而公遊佐殿御藩臣達ハ其
 許誰々と知給ふ小可六答へてまん侍ハ大
 繁藩中ハ覺へ侍る大館依然として座を居直



民助便船を
 求て
 須川に着く 図

語れバ大館借飲ひ俺ハ河ハ外方の役弟
 也東行の処存も此人目的を共許す測も毒
 問なして遠路の啓行外々を世家の止宿
 可六より酒肴を整へ大館は後心を切し
 て倘御要向も侍ふなバ僕通達なし申さべ
 し御遠慮なく命じ給へと云ハ大館深く感脱
 きて然ハ俺一封の書簡もハ河方へ贈らん
 と欲ふ某許届けてハ給ハるや可六畏り
 侍ふと云大館即時一通記認め可六之を
 遣与けれバ可六ハ直ち小俺家を出て天満川
 崎山山の館道急ぎて赴まける柳此山
 の下館と云ハ川崎渡川の西方は四方十町
 余の平地を横ミ南向小外面門を構へ東の方
 ハ堤ハ石垣を築き今上ハ高塀を結圖ハ北方
 へハ打廻して脊門を構ふ西方ハ惣石垣塀造
 り程ハ大厦高樓の棟を並へ諸藩中長家



四方は列る世時横河ハ山山の領する兩國大
 守の威勢を以基國足利家の免許を蒙り此下
 館を建ふる処ハ時の人之を川崎なる菅領家
 と呼なけり是ハ山崎波音川の京都三管
 領の謂を以上人恣こそ号けらるぞ然程ハ
 名長浦播磨屋可ハ大館の書牘を持て菅領
 の館内ハ進ミ入彼の河の長家ハ到りて通
 史を以書牘を遣与ハ河可六ハ對面あつ
 つ書牘を披閱て打駭き原來ハ其許の家ハ入
 來あそよ返書認む迫り建バ此方夕景
 では來訪せん余肯達し呉らるべしとて可六
 の便を勞ひ先へりへして三左工門ハ後
 より播磨屋ハそ走來りけり大館七郎右工門
 大き小飲ひ且互ハ一別の會釋を速て三左工
 門問て云ける様ハ書中ハ大祭ハ兼ハるなり
 併國遠々赴意ハ於ハ文中介詳りなる
 を知る足ぞ奈何なる仔細の有るぞやと問ハ



民助木屋

弁兵衛

至る因

七郎右工門声をひそめて和殿ハ俺従弟故秘
 秘ハ速バ併他言ハなし給ハるる七郎右工
 門世般止ヲを得ぞ人をあやめて立退し一介
 仔細ハ筒様くとして浮田と釘術誑合の意恨
 より弟子桶と計つて竊び込浮田を暗打よせ
 しての傳未ひそくと打噴まけるが彼朝日
 丸の掠奪一條ハる得ま巳ら悪を耻たりし
 亦ハ枉河畠山の倍臣ツへ管領同職の家柄を
 憚り音川家へ漏てハ一大事と彼是危踏心も
 有しや終る事実ハ語らざりけり七郎右工
 門再て云ける様就之和殿を目的と零時舍藏
 囉ハん爲いまど鎌倉主用を以在府せざる
 と思ひし故畠山殿藩中を脱し東向の存
 心頻し今日此再會ハ意外の幸甚万乞宜く
 憑入とて亦余儀もなく望まければ三左工
 門も従弟間の事ハ些も謀機せざ兼引して
 人討果すも武士の意氣地能こそ此方を訪れ



たりけり倅川崎の御別館ハ根も他よりハ
 通行出来ぎ世を竊ぶハ究意の処ハ然ハ自
 是同道して帰らんと振く促して席立んとな
 大館飲びて少刻と禁め且再會の税意と云
 殊も年始の吉慶も有ハ一盞傾けて御同道せ
 ん氣も春永侍ハギやと云ハ三左工門も打
 笑ひて和殿の懇志辭退ハせど久々の後心申
 し受人と元の座席へ押直れハ七郎右工門可
 六も指圖して美酒珍肴の調利せしめ亦もや
 酒席の玉揚りぐし可六も余座小進ませつ
 時を迂して燕樂なせり己も物更速びけ
 れハ枉河ハ大まな酩酊して噫太く長座して
 噫り然るも世俗も云如く夜道日ハ暮
 たりや卒同道と勧めければ大館ハ可六ハ
 數日の宿料も意付添て拂ひを遣し旅行行李ハ
 總るれハ已れ之を調ふらけつ家の程なる
 男女の的へも夫々暇告て立出れハ倉門返ま



大館迷まで
播戸に至り
枉河の會と因

でぞ送り出ぬ証河ハ大館を併侶て今夜三更の刻は速びて川崎の館中へつれ帰りたり噫思
むべし是此奸賊奈何なれハ耻を知ざるや比奥も他國も走りて生命保たんと地處を索
むハ実ハ人面獸心の癖者ハ人心ハ黑白の着ひ有る者官能此處を味ひ給へ早竟大館証河
便りて後奈何ある話説く有夫ハ次の巻の回下小到りて事詳説分べし

繪本佐野報義録初集卷之四早

明治十八年三月七日
同年五月十六日

翻刻御届
成

定價金十八錢

編輯人

故人 知足館松旭

原版人

大阪府平民 北村宋助

翻刻人

大阪府平民 鹿田源藏

賣捌人

東區安土町三丁目廿番地之内壹番戸 星野熊吉

賣捌人

木村二王堂

